主幹　麻生路郎

川柳雜誌

四月號

大正十三年一月二十三日第三種郵便物認可
昭和三年四月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌　第五卷　第四號

川柳雜誌社發行

▼本社四月例會

▼日時　四月七日午後六時半

▼場所　南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入　日本橋倶樂部

▼兼題　「借金」三句

▼會費　三十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

▼事務所移轉

本社事務所は去る二月四日に左記の處へ移轉いたしました

（會事務所宛の郵便物は總て新事務所の方へ回送するやうにいたしてはありますが過つて返送されることが無いとも限りませぬから特に御注意を願ひます）

大阪市住吉區杭全町
六〇三番地
川柳雜誌社事務所

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のために眞面目に支部幹事を引受け、極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨申込まれたし

川柳雜誌　第五卷第四號　目次

感想・評論

北廂記　長野吉高
虎になつた話　岩本素人
時事吟回顧　石賀馬行

研究・其他

川柳の本質（四）　田中辰二
時代川柳大觀に就て（下）　岡田三面子
漫詩漫感こもぐ集　長野晴濱
古句質疑　蛭子省二
月評　路郎、紋太、山雨樓、葭乃

募集句

卒業　蛭子省二選
ゴム靴　大島濤明選
大入　青砥不二綱、岩崎柳路共選
本社三月例會　橋本二柳子報
川柳家戸籍調　安井ひろし
各地柳壇（表紙）　吉田清
題字　小出檜重
編輯後記　革郎生

創作

川柳塔
川合舟々　酒井駒人
庄萬よし　安井ひろし
三好革郎　西本三笑
横田眠聲　太田朝陽
松盛琴人　岩本素人
竹内多門　岩崎柳路
橋本二柳子

◇

宮本銀砂子　中野柳陽
安西杏三　中見光路
水谷鮎美　中澤濁水
松丘町二　島田翠峯
水田黃彩　兼重白鷗
森田笑太郎　猪野燕柳
石川双葉子　朝田新水
本田柳一路　桑原京郎

粒々集

長崎柳秀　佐々木三福
塚崎松郎
近作柳樽　諸家

近作柳樽

路郎選

いつも來て寢るのか土手の芝がすれ　大阪　蒼悟樓
十年喰はずにたづた一萬　同　同
スパークを神の怒の如く見る　同　同
宴會にハツキリいやなやつと知り　同　同
ムツトして思ひなほした薄笑ひ　同　同
紙屑を家まで運ぶ氣の弱さ　同　同

正　月（一句）

常の事云はずに妻のまめ〳〵し　大阪　壽仙
御寮はんの肌をすかさず見て通り　同　同
立てかけた琴が鳴るてふ部屋に病み　同　同
今はもう野暮に見せたいばかりなり　同　同
かしわ屋の女房になつた恐しさ　同　同
雪なだれせめては清く死んだこと　長春　我卵堂
首卷と帽子を取れば叔父さんだ　同　同
お役所の旗みるまでは今日忘れ　同　同
會計の性質少し頑固です　同　同
春着會ダイヤの指で選みぬき　同　同
戀は叫ぶ親友ぐらい兄ぐらい　德島　流歩

燈臺の見え出すころに腹を決め　同　同

大木町にて（一句）

羊羹がひとり名を得た町に住み　同　同

早や妥協して繩飛の端をとり　同　同

不治だとて念佛だけは缺かすまい　大阪　秋風

帶解かぬ母の姿のいたゝし　同　同

振切つて出れば待つてた樣に雪　同　同

蒲鉾を兩手に握るだけの慾　同　愚陀

出戻りの白粉瓶が乾ききり　同　同

御寮人私立探偵へ用が出來　同　同

武子女史をいたむ（一句）

痛ましい死に梅の花咲いてゐる　香里　武子

脫ぎ捨ての着物に腹が立つばかり　同　同

もぢかしう春雨なぢを聞いて待ち　同　同

幸福は近くで見れば何もなし　大阪　汀柳

ドラックは廓へつゞくとこにあり　同　同

神樣にもなれるとこ云ふ二合瓶　同　同

生伸びた一年同じ空の色　螢ヶ池　刀四郎

嬉しさは喰ひしばつても笑ふてる　同　同

眞打を聞かず田舍の客と出る　同　同

黑眼鏡して滿州は滿州は　池田　白蝶

孝行も肩揉むだけぢや賴りなし　同　同

厚司がけ病氣を思ふ餘地も無し　同　同

使はれてゐるを忘れて働けり　大阪　さゝ舟

すぐそこと教へたいけど壁があり　同
只心こころのために表裏なく　同　雅幽
天と地と吾が一すのたましいと　同
病氣でもしてゆつくりと讀みたいが　同
お前には泣いて居られる閑がある　同　草明
聲色をつかつて父の好い機嫌　鞍山
同情の刑に服して涙なり　同
年越の髷を押へて逃げ廻り　同　卓
面談の煙管疊を撫でてさり　別府　晃
旅立ちの女房一言言ひに戻り　同
ふところ手焚火へ出すと話かけ　同
戸樋掃除鞠があつたと投げてくれ　盤ケ池　光哉
番傘をさせば霰のやうな音　同
そこまでの相合傘が恐ろしく　同　福岡　無限
マルクスへ濟まぬが今日は寒いので　同
飯盒に飯の少なき日記かな　同　大阪　斗露
隱さない年は兵からごつとふけ　同
子供心にうちは貧乏　同
はつきりと山の上なる春の色　同
人生を縮めて見れば恐ろしく　同　遊狂
カメラマン今日は屋根裏まで登り　同
定宿の裏は鐵道線路なり　同
街の石蹴られけられて溝に落ち　同　十紫
激賞の手紙に不足税がいり　同
お前等の爲めと消防疝が立ち　同
服脱いだ背伸びへごこか骨が鳴り　同　雨城
何よりも母の嫌ひな北枕　長崎

飛び石を渡れば近い梅林　同
佛師また尊きものに刻み上げ　同
その雇仲居春のお禮を忘れてず　同
大衆大衆と人を侮ごり　大阪
孝子傳きまつたやうに雪が降り　同
いつそ溺れてから働こう　同
水臭い話に火種盡きてゐる　神戸
　友の卒業を祝ひて　同
脱ぎ捨てる服に未練が限りなし　同
指先のさす善惡はあからさま　佐世保
七たびも生れ變れるとこでなし　佳人
血みどろな骨鷄のお手料理　同
誘惑にまかせ切つたる目の動き　島根
望みだけ馬鹿に大きい講義錄　同
厄年をつゝましやかに茶の稽古　綠之助
ボマードの香ひで來るも二十過ぎ　同
つばくろの飛ぶ日を草の上にゐる　大阪
別嬪でないと車掌にして呉れず　伴内
友達の噂さに上がる美裝員　同
胸の雪サシで叩けば金釘　同
天窓はごの光りにも媚びてゐる　白帆
安心を強ひられてゐる父の齡　同
淋しさは蕎麥に喰ひつく友の顔　よし江
冷やゝかに笑へて來るも酒でした　同
茶漬食ふ箸の固さの獨り者　北仙
別嬪になるのやなあと洗ろてやり　同
轢けるなら轢けと鶴嘴よく揃ひ　大連

此の人が大盡遊びしたと言ふ　同　賀名芽
人間だもの愚痴も出まする　同　泰平
入選で母は里への道が開き　同
女房の前で女を思ふてる　同　館
御地の冬にあこがれると葉書が來　國　春忘
徒然の聖書「汝等惡に勝て」　同　太路
事がなく濟んで警戒物足らず　堺
人情の機微ハツキリと知る四十　同
心まで霞のかゝる春の日ぞ　神戸　春公子
ようのまぬ煙草にむせた色眼鏡　同
大阪へ來ても矢張り共稼ぎ　大阪　九柳
御馳走をよばれるだけの今日の役　同

二月二日亡姉の百ケ日に（一句）

百ケ日母を呼ぶ子の憐れなり　同　萩麿
散らかつた三味を風呂から戻つて見　同　惡源太
影法師大きくなつて怖くなり　同
未來など考へてれば腐り出し　同　耿三
こびり着いてくる弱者の抵抗　同
親と家があつて俺には春がない　同　觀月
知つて居る事まで聞いて見たい仲　同
孃さんと言はれる程の顔でなし　同

路郎氏へ（一句）

師と共に喰ふうれしさのかやく飯　魚崎　亂耽
はからざりけるスキーでの死よ　同　子
親無し子無し何の光りで生きて居る　香里　武子
貧しさのゑらさがわかる後家の家　同
齒磨粉ぎてらの襟へちとかゝり　神戸　郊村
父無し子淋しく露次の口へ立ち　同

順禮へ忘れずにやるい、暮し　同　嶺月
腕時計みつめてゐると動いてず　同　同
靴磨く一人となりし淋しさよ　大阪　石竹
甘い戀が雜を呼ぶ妻となり　同　風流坊
卒業は明日の角帶承知なり　同　春枝女
欺されて東京行に乘る娘　同　武藏坊
よく呑んだ樽に並べて瓶を賣り　京都　桃妖子
罪の子を皆んなが惡くして仕舞ひ　鳴尾　鳴玉
いつわりの顏が鏡の前に出來　石川　水聲
少うしは氣にする樣に言ふたのに　大阪　籬楓
金持の育ち落第苦にもせず　同　吉朗
捨てられた樣でないのが別れゆき　安東縣　花蝶
苦勞だけして來た妻は今日を見ず　大阪　新一郎
丸髷の形が古いと言はず生き　神戸　水火
願つてはゐたが閑では困るなり　大阪　草之介
眞に受けて勝手の違ふ事になり　同　三五樓
出し合つて何を買ふやら姉妹　甲府　素有子
無心だらうともう心得た顏になり
故郷へ歸るつもりの行倒れ

松方兄弟に

あれだけの榮華は行金だつたのか　大阪　虛白
花札を握つて立つも電話口　神戸　北柳
もう俺も大人を自覺する年だ　兵庫　珍郎
大火事を見せて燐寸を怖がらせ　山梨　一笑
慘劇に借家重たい壁の色　長春　東狂子
まつたく別々のもの恩ある娘　奈良　藤作
女房が泣いて後悔したと見せ　和歌山　玉仙
血と汗が乾き人間味を覺へ　大阪　凡平

切られるかと思ふ程床屋話入り病人を乗せて俥屋氣が疲れ友禪へ娘盛りをハッキリ見一つ身を里は矢鱈に送りつけ叔母さんの頭が下がる金を貸し節穴を見付けたやうに寒い風追從をしてうか〳〵と年をとり三味線を持つて凍へて哀れなり許嫁いぢらしくつて近付けず卒業は親へ不孝の終ひなり仲裁が這入つて男不利になり神様のやうに産婆は明日と言ひ猿廻しおぢぎは猿にさして置きたま〳〵に早く歸れば意見され寒行のデン〳〵太鼓寒ふ聞き大入と書けど人氣の上りかね一服をすゝめて椅子を廻轉し二八てふ娘盛りは笑ふてる念佛に母の弱さを知るタべお正月突き當つても御芽出度う上戸客とは知らずに客へ米を研ぎ新道が出來て町長先きに立ち ハーモニカ昔の戀のやうに聞く 凹こんだ硯に先代思ひ出し 電報夫帶解けの妻見て歸り 教習所出たてか巡査よく叱り あの人に始めて會つた此の廊下 胸の音氣になるならば抉り取れ

和歌山 庚子
甲府 愛波
島取 穂波子
大阪 呵々子
同 陽喜亭
兵庫 香行舟
大阪 孤舟
同 申哉
三重 昌幸
不明 はる男
大阪 幸泉
和歌山 柳哉
神奈川 保壽
大阪 種次郎
同 將兵
同 陽春
大阪 雨迷
同 竹二
同 太閤
尼崎 二水
大阪 鯉友
小坂 兩足子
蠻ケ池 寂郎
大阪 秀郎
蠻ケ池 玉政
同 邦文
同 はじめ
同 彦春

北廂記

長野吉高

曾て、川柳と言ふ語を、さる外人が譯して『ショート、ウイッティー、オーデ』と言つてゐたのを見た事が有る。

日本を最も深く研究した例のアストンは、其の著『ヒストリー、オブ、ジャパニーズ、リテラリチュア』に於て、隨筆なる語を譯して『ショート、エッセイ』と言つてゐるが、當時私はこれは適譯だ、と思つて感心してゐたが川柳の『ショート、ウイッティー、オーデ』の譯を見るに及び隨筆の『ショート、エッセイ』以上の名譯だと思つて佩服した事が有る。

私は川柳家ではない。川柳家どころか、川柳に就いては全然の素人である。川柳を專門に研究してゐる樣な人から見れば、駄論を吐いていやあがる、と思ふかも知れないが、然し素人には素人から見た、川柳觀と言ふものが有る。私はたゞ私の思ふだけの事をすつかり素人らしく言つて見たいと思ふ。

或辭書に、川柳とは一首十七字より成り、俗言狂句のうちに諷刺規箴の意を寓して作るもの……と言つてあつたのを見た事が有る。此の語は、果して正しいものか否かは別として、兎に角、川柳と言ふものは、ウイットを離れては、其處に成立しないものであると言ふ事だけは、私の樣な素人にも解る。

滑稽と諧謔とそして諷刺とを區別して、兎や角と面倒な理屈を述べてゐる人が時々ある。一體この滑稽と言ひ、諧謔と言ひ諷刺と言ふのは、私達が左樣に區別するのでなくて、區別せられるものなんである。滑稽と言ふものが時に諷刺になつたり、諧謔が滑稽にされたりする。つまり其れは、事物に依つて自由にせられるもので、決して私達から、こうだと定めてかゝる性質のものではない。

滑稽と言ふものは、滑稽其のもので終るべきものではない、滑稽の中に悲哀が有る。同樣に又悲哀の中に滑稽が有ると言

へやう。

卽ち悲哀は總ての滑稽を包括する諧謔と言ひ諷刺と言ふも、要する、其れは滑稽に過ぎない。然して事物に依つて其處に深刻なる滑稽と然らざる滑稽が生れる。私達の兄弟は、これに名づくるに強ひて諧謔諷刺の語を用ひやうとする。而もこれに無理に字義的解釋をつけやうとする。彼等は只其の枝葉に走つて根本を見ないものである。滑稽も諧謔も諷刺も、皆つゞまる所同一點に逢着するものである、然らば滑稽とは？

滑稽は酒器なり、と言つた人が有る。酒器の酒を出して盡きざるが如く、捷辯更に窮する事無きの意を言ふのであらう。卽ち滑稽は引笑である。引笑は剋笑で、剋は齒本、つまり齒を露して笑ふ事である。禮記に『笑ひて剋せず』と有るのは其れである。

滑稽は英語で、ジョークにあたり、ゼスティングにあたり、或はファン、ユーモアー、バン、ウイツト、ウィツチシズム、ジョークラリチー、ブリーサントリー、などに相當する。是等を語義的に見て行けば、皆多少の相違が有る。然し、結局は其處に、滑稽を離れては何も存立しない事になる。

サティアーを、諷詰、落首、禁句、惡口、譏刺、諷刺、嘲笑等と譯す人が有る。又其の何れかを採つて辭書の解にあてゝる者が有る。然し、これとてやはり滑稽と譯して意味は通ずるものだと思ふ。

川柳は、要するに十七字の中に、此の滑稽を十分に盛つたものであると思ふ。然し、其の滑稽たるや、決して滑稽其のまゝでは終はらない。滑稽を通して人間相を見、滑稽を通して私達のレーベンに迄觸れて來なければならない。

あの十七文字の、其の一文字には切れる程の肉と血が通つてゐるのが川柳である。假令一文字と雖も、生きてゐないものゝないのが川柳である。多くの文字を綴つて、人生と言ふものを描き、又思想なり感情なりを盛つて行く事は比較的容易である。然し、たつた十七文字の中に、夫等のものを盛つて行く、其處に川柳として獨自の妙味がある。

私は、和歌の事も、其して又俳句の事も知らない。然し、和歌も俳句も、單に表門から、ナツールと言ふものを見、一つのベケントニスといふものを見てゐるに過ぎない。其處に和歌と俳句の生命が有るのであらうが、然し川柳は、總て其等のものを裏門から覗いてゐる。前者が人生の横斷面のみを示してゐるに反し後者は人生の縱斷面を見せてゐるとも言へやう、一は、横へ〳〵と太い線を並べて行くのに比し一は縱へ〳〵と細い然も強い線を並べて行くのである。

エミール、ゾラは、其のルーゴン、マツカアル叢書第一卷から第二十卷迄、其の作中に活躍さす人物は一千二百人、用ひる語實に二百五十餘萬語だと言はれてゐる。

然し、川柳はたつた十七文字の中に此等の總てのものを、ゾラが描いた總てのものを描出し盡す事が出來るのである。

ベーテル、アルテンベルヒは
人間を一成句に、精神の閲歴を一頁に、其して風景を一語に描寫する……。
と言つたが、川柳は實に、只の一文字の中に是等の總てを描寫し盡し得るのである。アルノー、ホーリーは、電信體の詩と言ふものを作つた。其れは、彼が在來の詩の格を破つたもので、頗るふるつた面白いものである。假令ば
イッヒ？
デル？
レエンゲスト？
等の如きものであるが、然しこれとても、所謂智慧の快樂で、其處には感情の動きといふものが見ねぬ。十七字の中に、感情を盛り切りて、然も自由に其れを動かしてゐる日本の川柳などゝは、到底同日の論ではない。
川柳は、何時頃、其して如何にして生れたか、に就いては、川柳專門の研究家がゐるだから、全然の素人の私が、何も出しやばつて今更、川柳發達史を茲で、述べる必要はないと思ふが、然し素人として、私が聞いたり見たりした所の川柳史とでも言ふものに就いて一言述べてみたいと思ふ。
無論の事、確實な文獻や嚴正な考證に因つてゞなく、單に素人としての極めて常識的な見方であるから、若し間違つてゐたら、十分の御叱正を願ふ次第である。

今、川柳に就いて述べる前に、俳諧と俳句の事に就いて一言したい。
俳諧や、俳句はこれを連歌より出たものと見る事が出來る、然らば、連歌とは一體どんなものか？
連歌は、聯句（連句）を眞似たものである。然らば聯句とは？
聯句とは、二人若くは二人以上で、各一句を案じ、合して一の漢詩を作ることである。支那では、漢武の柏梁臺より、六朝の時已に有つた。唐の文宗、柳公權と聯句の詩があつてより、李太白、顏眞卿、韓退之等皆之に巧であつた。
連歌は、聯句と同一技巧のもので、一首の短歌を、上下の二句に分ち、兩人で合作したものである。えびす歌とも言ひ、筑波の道（これは南北朝の頃　二條關白良基が救濟法師といふ連歌の名人と謀つて拵へたもの）とも亦つらね歌とも言ふ。上古の連歌は、片歌を以て問ひ、片歌を以て答へ、其の問答を合して一の旋頭歌を爲したるもので、神武天皇が
あめつゝ、ちどりましとゝ、などさけるとめ
と言へるに、大久米命が
をとめに、たゞにあはんと、わがさけるとめ
と答歌したのが始めである。旋頭歌は多く流行せずして終つたが、後に三十一文字の歌を二人して連ねたるものに某尼が
佐保川の水を塞きあけて植えし田を
と言へるに大伴家持が

苅るはついひはひとりなるべし

と言つたのがある、古來連歌の起原と言はれてゐるものに、日本武尊が甲斐國酒折宮で

にひばり筑波を過ぎて幾夜かねつる

と言へるに御火燒の老人が

かゝなべて夜には九夜日には十日を

と言ふのがあるが、普通にこれを連歌の始めとしてゐる。後、連歌は遂に短歌の上句を唱へて下句を續ぎ、或は下句を棄げて上句を加ふるを以て其の體をなす樣になつたが、其の始は、一のなぐさみに過ぎなかつたのが、鎌倉時代の中頃から獨立して終に其れを專門にやるものが出來る樣になつた。

後撰拾遺等の勅撰歌集中にも、稀にはこれを載せ、全葉集には特に連歌の名稱をさへ設けて收錄してある。其後次第に盛んに、其の事書に見ゐたのは、續世續花の主の卷にくさり連歌と有るをはじめとし、次で後鳥羽天皇の時、源家長が源氏國名の百韻連歌をなし又建保五年四月後鳥羽上皇庚申百韻連歌を催さし、藤原家隆等勤仕し、益々盛んになつて來た。藤原爲世、同爲相等は連歌の法式を定めたと傳へられ、其後應安五年には二條良基、救濟、周阿等と謀つて新式を作り、享德元年には、一條兼良、宗砌等と共にこれを追加し、文龜二年には牡丹花肖柏が更に新案を加へて茲に連歌の法式が大體成つたのである。

俳諧とは、つゞまる所以上の樣な連歌の變體である。俚言俗語を詩化せる連歌の一體である。故に又俳諧の連歌、連俳とも言ふ、元は誹諧と言つて後誹を俳に改めたのではあるまいか？連歌には、一種の狂連歌と言ふものを生じ、純正連歌に遊ぶ者を柿の本衆、狂連歌に遊ぶ者を栗の本衆と言つたが、是が後世に於ける俳諧の濫觴を爲したものと言へる。室町時代の末葉に山崎宗鑑がある、彼は、形式的連歌風を脱したのみならず、狂連歌中の狂連歌とも言ふべき極端な一風を創始して、盛に磊落の氣をやり、俳諧の新芽は茲に最も力有る萠出を見たのである

大永五年、荒木田守武は狂連歌と宗鑑風とを折衷して一夜百吟を試みた。所謂世の中百首、或は伊勢論語と稱して教訓を主としたものである。天文九年獨吟千句の著がある。其して又俳諧連歌の式を定めた。純正連歌が高尚で貴族的なるに反し、俳諧の連歌の俗耳に入り易く、趣味清新なる爲め、連歌を捨てゝ俳諧に入るもの益々多く、隨つて其の調も亂れ樣とする時、松永貞德が出て之れを統一したである。宗鑑風の連歌を、俳諧連歌と言つた。慶長三年勅に依つて貞德は花咲翁と稱し花の本の稱號を賜ふに及び、連歌俳諧全く劃然たる分離を見、正保三年花咲亭に於て、貞德俳諧の式を定め、慶安四年には、御傘世に公にした。この貞德の沒後數年ならずして、西山宗因が檀林風の其れを唱へて一時に隆盛を來した。假令ば

大般若波羅蜜女の祈禱かな

の如く滑稽、詞句を弄したものである。然しこの檀林風が盛んになるにつれ、其處に一の惡弊を生じ、俗惡な調想に陷つてしまつた、所がこの宗因の門人に例の松尾芭蕉が出た其して幽玄閑寂を以て生命とする正風體の俳諧を唱道する樣になつた。然し、俳諧より出でた發句の流行は、終に俳諧を壓し、俳諧と言へば發句なるかの如く思はしむる樣になつた、俳諧は、連歌から來たものであるから其の樣式の如きも和歌と狂歌との關係の如く難易の別は有るにしても、連歌の方式を其儘採用したものが多い。去嫌の如き、折方の如き花月の座を定めたるが如き是である。其して其の第一句を發句と言ひ、第二句を脇句とよび第三句以下は、數の順序の如く、第三句以下第四句第五句と唱へ、最後の句を揚句と言ふ。又句數によつて百韻、七十二韻、四十四、五十韻、歌仙、源氏、長歌行、短歌行、簸、首尾、三ツ物の名目があるが、この他漢和　和漢、繪畫をもつてせるもの、繪と句とを合し連續せるもの等變體も多い。折を初折　二の折、三の折と續け、各表裏があり、最後の表裏を名殘の折と言ふ。俳諧の第一句を、發句と言ふことは既に述べた通りであるが、俳諧名目抄に依ると、假名で書く時は、ホクと書くとあるが、俳諧名目抄に依ると、假名で書く時は、ホクと書くとある

天明時代の文藝で、最もよく知られてゐるものは例の狂歌である。連歌が俳諧の連歌となつてから、其の體が狂歌に似てゐたから、俳諧道の人々は往々狂歌を試みた。この狂歌と類を同じくして共に天明に盛んであつたのは川柳である。川柳は、一般、檀林派（談林）から出たものと考へられてゐたが、中根香亭翁に至つて、其の前句附から出た事を明かにした。前句附は連歌の餘流で、前句と言ふ一句を出して、之に思ひ思ひの句を附けさすので、其れを附句と言ふ。これは、元祿の頃から流行したもので、人のよく知れる者は

切りたくもあり切りたくもなし

と言へる前句に

ぬす人をさらへて見れば我が子なり

と附句したものが是れである。

丁度、俳諧の連歌から俳句が獨立した樣に、前句附から獨立した狂句が即ち川柳である。川柳の名は、明和頃から名高い斯道の點者の柳井八右衛門の號であつたのを、やがて狂句の名としたのである、と言はれてゐる。

以上述べ來つた所は、川柳史に非ずして恰も俳諧史の如き觀があるが、然し、川柳に思ひを致すの時俳諧を忘れてはならない。俳諧を云々せば、其處に連歌を忘れてはならない事は、今更言ふ迄もなからう。俳諧を研究し、連歌のよつてもつて來る所を論ずれば、川柳は如何にして起りしや、は自然と明白になると信ずる。私は、不幸にして未だ、川柳史といふものを見た事がない。故に私の所論が、或ひは誤つてゐるかも知れないが

然し要するに川柳は其の淵源は遠く連歌に有り、と斷ずる事が出來ると思ふ。

川柳に就いての細かい論は、專門家の領分で私の出る所ではない。

詩に就いて言へば、川柳に相當するものに狂詩と言ふのがある。例の蜀山人は、寢惚先生の名を以て狂詩を詠じた。貧鈍行と題し

爲レ貧爲レ鈍奈レ世何
食也不レ良吾口過
君不レ聞地獄沙汰金次第
干レ拝追付貧乏多

又、京都に蜀山人と時を同じくして銅脈先生と言ふのがあつた

無馳走と題し

無レ人難レ買レ酒
有レ客飯不レ餘
終日唯茶許
嗚呼何那與

狂詩のをかしみは四角の漢字にして韻字あり、平仄あり、然もこれを讀めば漫然たる卑言、俚語なるの不釣合、不似合なるにある。其して、其の深刻なる人間相を描く事に於いては、狂詩は到底川柳の敵でない。この狂詩を作るには、漢學の力を要するが故に、終に流行を見るに至らなかつたが、其の滑稽味を盛るの點に於いて、川柳には一歩も出てゐない事を知るべきである。

私が學生時分、世話になつた教授が井上劍花坊氏と友人であると言つたのを憶ねてゐる。劍花坊氏が川柳の大家か何か知らないが、私は子供の時分から劍花坊氏の名前は知つてゐた。劍花坊氏が友人だ、と聞かされてピンと私の頭に來たのは、川柳といふ事である。つまり、劍花坊氏を通じて始めて思ひ出す程度の川柳しか私はもつてゐないのである。其の教授は、國文學方面の講座を持つてゐたが、頗る痛快漢で、講義なぞ音吐朗々天井の塵迄はたき落さんばかりの猛烈さである。酒もしたゝかに呑む。所が劍花坊氏がこれ又酒がいけて、而も音吐朗々たること其の教授と同じとの事だつた。二人が寄つて話すと丁度喧嘩でもしてゐる樣だと人が言ふ……とは、其の教授の話。

私は酒は呑まない。然し、一度その教授を通じて劍花坊氏に會つてみたいと思つてゐたに到頭其の機會を失してしまつた。

私の川柳に就いての事は、大體こんなものである。全然の素人である私には、川柳に關しての事は十分に解らない。このさい、川柳に就いてもつと〳〵研究に精進したいと思つてゐる。

ふれてみたくもあり恐ろし牛の角

時代川柳大觀に就て（下）

岡田三面子

さいふから出たはいかい御高なり　五三三頁

さいふから出たにはいかい御高なり　樽二二・二一・七

御領（地脱？）は九曜の星に六をかけ　五三六頁

御虫干見ぬ御先祖の物がたり　五三七頁

細川を限らず、鎧などを見て、野に伏し山に伏した先祖を追懐する、一般の實情を解したし。

明後日と決めて亡ひる（たの誤）紺屋の子　樽三六・三九・一八。五四一頁

お竹の十念犬曰くおそれるぜ　五四九頁

お竹重年犬曰く恐れるぜ、重年は出代りに代らず、續いて奉公すること、犬は貰ひ物がないから、甚だ喜ばぬ。

神佛凡夫と化して御名は竹　五四八頁

神の化身の竹、思ひ出せぬ、垂教を乞ふ。

お茶の水出來（上脱？）る頃御目が覺め　五五二頁

本格で行くと廓へ納まらず　五五三頁

仙臺さんに限らず、尾張公でも、榊原侯でも。

傘も下駄も三浦屋派手なこと　五五五頁

此の傘は太夫のでなく、尾張公の鼈甲の笠。

御下駄はふられ傘は持てるなり　五五六頁

山人を振り山鳥になびくなり　五五九頁

山人＝仙臺さんは否、山鳥＝嶋田に命まで

浮世を非に見ず嶋田は頼むなり　五六八頁

不明

前表はうすき秤にぶらさがり　五六三頁

前表は薄きちぎり（杠秤）にぶら下り　樽一一・一七・一

金づくし（し衍）になると島田は川支へ　五六三頁

紅葉狩した（の脱？）であとは車留　五六四頁

家老高をくゝつて申上げ　五七一頁

一眼でとつかへべいを赤んべい　同

白石は言ふだけのこと先手なり　。

白石は五百手程も先が見ね　樽一五・二二・一三　同

白石は六十四五手先が見ね　五七三頁

八百といふと片倉咥になり　同

白石の工風責合なしにする　同

五百萬石は白石妙手なり　樽一一・四一・一四　五七三頁

國家老以下八句が、門番に化けた片倉の句と混淆して居て、其の意を判じかねる讀者もあらうと思ふ。

其角がないとおたすけに出る所　樽二四・八・二　五八一頁

註の兩乞のお助け踊といふは全く初耳、詳しき事を承知したし、物實ひに出ることゝばかり信じて居たり。類例

勘平が母おたすけにでも出たか

傘を貸す　家の　隣で　雨が　降り　五八三頁

越後屋の稻荷を其角　恥ぢしめる　同

特に第二句が長年の不可解のもの。

雨(乞脫)は二タ口しめ　て　四十八、　五八四頁

歌はうちまき發句で、(は脫)米を下げ　同

づぶろくの仕打、(末脫)世のかゞみなり　五九三頁

となり屋敷でも月見ごこ　でなし　五九七頁

義士の討入に關係なく、何所かの屋敷に八月十五夜、騷ぎが起つた事があるやうなれど、思ひ出せず。

杉菜さへ知らぬ雲間につばなの穗　五九九頁

つばなの穗不明、拔刀のことか。

きたない最期白無垢が屎(炭?)だらけ　六〇〇頁

十四日拔身を背負つて夜道する　六〇二頁

討入でなく、相州大山詣。

首一つ五萬石(餘脫)のかたに取り　樽二六・二四・二　六〇六頁

門前てすの字しのび京へ行き　六一六頁

不明、脫字あらん。

一力で犬に喰はせた赤鰯　六三五頁

此れ以下六句、茶屋場の由良之助對九太夫の事である以上、六三一の「蛸のうつぶん赤鰯で晴らし」以下の四句、此所に挿入すべきもの。

九太夫もちよいと拜むは秋の月　六三一頁

九太夫もちよいとは拜む秋の月　六四四頁

時鳥左樣ならばと啼いたやう

後德大寺の、たゞ有明の月、とも取れる、動く句。

年々の草で三馬(は脫)食へるなり　六五九頁

澤瀉一葉神農も齒が立たず　六六二頁

澤瀉を神農横ににらめつけ　樽三・二七・一四　同

此の二句は直接神農に關するのでなく、本郷の兼康の壁に畫かれた像の神農。例證

兼康でばかり神處壁にされ　樽　九〇・三六・表

本郷の屋根に神農かゝりうど　樽一三五・三一・裏

梅の近所で澤瀉も匂ふなり　樽　五・一・一三

せりといふものが出來たと桀の民　六六六頁

樽二五・一八・一一の句で、せりとも讀めるが其實ぜう＝錠である、貫木(くわんのき)は桀王の代にはじめたり、と同じ着想。

吉廣の太刀がこわいと姐己いひ　樽三・二四表　六六七頁

註に、妲己日本へ來て玉藻前と現れ吉廣の太刀で殺さる、とあるには一驚を吃しました、玉藻の最期に就ては、本書一九六頁以下所述の外に傳說はない、此の句は、終南山の道士、名は雲中氏が紂王に宮中の妖氣を拂ふ爲め、木劍(大山詣り吉廣の太刀も木劍)を献じた之を咏んだもので詳細は拙著虛心觀三七一頁以下を一覽ありたし。

聖人の御代に二人はひだるがり　六七三頁

聖人の代にも二人りはひだるかり　樽一一・四一・一八

朝なゞはかくの通りと老萊子　六七六頁

寢小便でなく、前を捲くつて陽氣の盛なるを示すこと、朝○○といふ俚諺もあり。

三日(日脫)はあゝひだるいと曰はく　六七七頁

變なものぶち殺したは西の狩　六七八頁

山林を探がしあてたは西の狩　樽五一・裏　同

西の狩すでに山師がつくこころ　同

此の三句を皆孔子對麒麟の中へ挿入せられたが、後の二句は疑も無く、文王が西の狩へ出られる前の靈夢で、遂に太公望を獲られた事に關係す（拙著虛心觀三八九頁參照）たゞ第一句西の狩の辭は文王の夢を連想せしめ、ぶち殺し麒麟らしくも聞ゆ、不明。

木枕も無くて顏淵たゝを云ひ　樽五一・八裏　六七八頁

論語述而第七、肱を曲げて之を枕とす樂みも亦其中に在り、からの句作なれど、たゝの意不明、駄々にては餘りひどい形容、誤寫？

小便をしては顏淵書物を見　六七〇頁

陋巷生活を謂ふのであらうが、小便をしては、が不明、一々惣後架へ出掛けることか、虛心觀四四〇頁參考。

始皇帝壁の中まで氣がつかず　六八三頁

始皇帝壁の中には氣がつかず　樽二二・一九・一五

秦の闇魯の壁であかるくし　六八三頁

秦の闇魯國の壁であかるくし　樽四五・三三・七

ちよつかいを出されて莊子目を覺まし　六三四頁

註の語不十分、夢に蝶に成つて居る所へ、猫がからかつたので目が覺まし、莊子にかへる。

范平と名をかへて(て衍)看賣つて來る　六九〇頁

看賣劍の舞で犬を舞ひ　六九〇頁

果して范蠡と限るべきか、一般の實況と思ふ。

置石に手を取つて居る吳の軍師　六九三頁

からつ手(で脫)寶合せに吳子皆勝ち　同

判つたやうな判らぬ句、乞高敎

吳の國の聟は女房を連れて逃げ　六九六頁

七五一頁玄德が孫夫人を連れて逃げた事。

ありがたさ木篇公より御拜領　七〇四頁

始皇の松でなく、德川時代、松平の姓を賜ふ事。

肌のいゝ子供をつれて徐福來る　七〇六頁

肌は秦の秀句、はたと假名であるべきか。

始皇帝魯の上で旅やつれ　七〇七頁

次の長城の中へ挿入すべき入れ違ひの句。

名の高い阿呆は馬鹿と親子なり　七〇八頁

阿呆親王と樂平の事にてはなきか。

始皇帝壁の中秦の闇魯の　七一〇頁

二句共六八二頁と重複、前に正誤あり。

馬の氣で車に乘つて笑はれる　七一二頁

木曾義仲の事、本書二八八頁にあるべき句。

韓信へ劍のやうな口で賣り　七一三頁

樽二六・二四・一六と同四二・三一・六に重出、註に喧嘩をしかける、とあれど、これは活字本通俗二十一史の中の漢楚軍談八三頁、張良賣劍說漢信、の一段を咏んだもので、本出七一七頁張良の項にあるべき句、類例

劍を賣り賢を求める張子房　樽一四九・九裏

賜はるも賣るのも劍は切れた智惠　樽一二六・五五

かんにんをする(が脫)漢信かなめなり　樽五七・三二・裏　七三頁

韓信はすでにはんとに出る所　樽一三・八・一。　七三頁

はんとは半途、前記漢楚軍談卷之五一〇二頁、蕭何月夜追漢信、の一段韓信が漢を去ると見せかけた事をいふと解してよろしきや？

寢坊目がと張良は怒られる　七五頁

寢坊目（奴）がと張良はしかられる　樽六・二四・八　其張良はのはの字柳樽元刷刊示六編二四丁には無く改刷本六・一七・二及び底本明和五子年萬句合禮六表にはあり。

張良は口も劍で賣りつけ（る脫）　七一七頁

樊噲に質屋の丁稚縄をかけ　七一八頁

何の酒落か相判らず

張良は八白餘騎と吹きなされ　七二〇頁

此の句も其酒落不明

呂公でも生洼ひしほにならぬなり　七二二頁

張良が韓信・英夫・彭越と違ひ呂公に殺されなかつた事か、でも生涯の語法不明。

鍬にまではごたへのした孝の道　七三〇頁

郭巨の釜よりも、寧ろ孟宗の竹の子ではなきか。

桃園で新宿へ行く義を結び　七三二頁

中野、大久保邊に桃の園があつたか、四谷赤坂邊に桃園と云ふ茶屋でもありしか。

趙雲も後家しめの場は律氣なり　七四二頁

後家しめの場、相判らず。

玄德はかゆい所へ手がとゞき　七四七頁

孔明を迎へに行つた時の仕打の評か？

格別の智惠で錦の袋入　七五一頁

でゝも判るがなの誤寫ではなきか。

遊藝が孔明一度用に立て（ち？）　七五二頁

楊貴妃はかんちん縫の上着なり　七七〇頁

かんちん宮にでも利かせたのか不明、樽一三・七・一七。

唐の人魂を日本でめつけ出し

次の頁熱田明神の中へ挿入すべき句。

長安の御用ふらすこ集めてる　七七二頁

長安の居酒屋葱に羊なり　同

長安の縁で末にでも附加するは可、李白には限らず。

李（太脫？）白筆でとつぷり藝を出し　七七五頁

とつぷり、不明。

樂天が又來るとと人玉が出る　七八〇頁

玉は丸の誤？

名の高い子供德利や瓶を割り　七八二頁

德利を割つて名高い子供、誰？

蚊に喰はれ虎に喰はれぬ孝の德　七八五頁

註に所謂千里の藪に入つた和藤内でなく、蚊に喰はれは、廿四孝の一人吳猛、虎に喰はれぬは、同じく廿四孝の一人楊香が事

臥して名の高いは釋迦と花の兄　七八八頁

花の方は臥龍梅、釋迦の方は嵯峨の臥釋迦。

……×……

衒字、脫字、誤寫、誤植、不當の解釋がまだ〳〵あることゝ思ふ、然しながら句と註釋とで七八九頁といふ一大册と爲し、此に一〇頁の編年次式目次と、假名順七七頁の大索引とを添へた著述は、斯界唯一の美擧といふべく、柳句を樂しむ人は勿論一般の家庭にも、必ず一本を備付けて、笑ひもし啓發もせられんこと、熱心にお勸めする。（完）

漫畫 人の一生（二）

川柳 路郎 評
柴舟 畫

菓子一ツ殘して大工みんな立ち　駒人

他人の眼をかすめては菓子はおろか、器までも失敬してはゞからざる人間の野獸性も、最後の菓子一つを中に挾みて手を出す者なし。飽きてあまれるにはあらず、群衆環視の中におかれたるか故也。列國の外交を思ふて微笑禁ずる能はず、かゝる時何等顧慮するなく之を奪ひ得る者、けだし極端なる愚者か、果た又腕力に於いて他を壓し得る者に外ならず。僅に一個の菓子により心の奥み見透さるゝを厭ふところに、見榮こ嫉視こ妥協こ卑劣を打つて一丸としたる心裡の動ゝを見る。

下宿料を拂ふて心細うなり

小蓬

與へらるゝもの甚だ薄し。故に、のべつ幕なしの勤儉週間なり。別に簡易生活を理想とせるにはあらざる也。もてるものとし云へば貧弱なる机、幾册かの本、薄汚れたる座蒲團あるのみ。世上、食ふてチョンといふ言葉あれど、下宿料を拂へば眞にチョンなり。もしそれ贅とし云はば、風呂錢を節して喫茶店を襲ふが關の山なり。花が咲かうが咲くまいが、心ほそき懐と何等の關係あるなし。春秋を一室に閉ぢこもり、僅かに碧空によつて慰めらるゝに過ぎず。時に下宿を出ずるの日を夢むと雖も、鎌足一枚に足らざる生活を如何せん。

人間の智慧錠前を頼りすぎ　其象

若き夫婦ありけり。家財一切を一箇の錠前に托して歡樂の巷に遊ぶ。遊び疲れて、夜に入りて歸宅す。戸を開かんとするに、戸に錠前なし。心をごる、不安は怖れと化す。説明するまでもなく、空巣の御入來なり。ダイヤの指環、金側時計、そんなものは無かつたかも知らねど、彼等のもてるものの、よりよきものは悉く影を殁せる也。

泣くに泣かれざる心、腹立たしき心、小さき錠前に信頼し過ぎたる悔心の入りまじりて勇き出づるも時既におそし。かくして人間は何物をも信じ得ざるこゝろを養はる。悲しむべし。

薄情の喰べたくないを押し通し　刀三

結婚は戀愛の墳墓なりといふ。至言なりといふべし。同棲して幾年か過ぐ。家庭の塵埃に汚れきつたる妻、今は見るだに嫌也と叫ぶ夫のこゝろは死火山にも比すべきか。愛は光陰に反比例して冷却せるなり。生活の低下は妻・女房・嬶・阿魔と呼稱さへ漸次下落して又顧みられず。

女房のとつつく縞は値が高し

なぐ嘆じられつゝも、その幾分を滿足せしめられたるも今は夢なり。食事さへ拒避して、その薄情表現の具とす。女三界に家なし、嘆ずべし。

川柳の本質（四）

田中辰二

私は川柳の本質に於て明るい輕い淡い自然的の笑ひと此のサチーレを不完全ながら述べた、此の二つを除いて川柳の生命は無い筈である。そして作句家は此の明かな笑ひと深諫な刺笑を得んが爲には其處に樣々な想像を描いたり穿鑿を企てたりする。所謂うがちであるが、之が川柳の又一つの大きな基調となる。

そら寢入のつぴきならぬ蚊にくはれ　（拾遺、明和）
もてぬ奴まだ藥でもやる氣なり　（拾遺、拾遺）
心まちすしや按摩の聲ばかり　（拾遺、明和）
楊貴妃の謠宵から二度通り　（柳樽　四）
ほれた奴見苦しい程使はれる　（同　六）
此あばた見つけなんだと仲のよさ　（同　七）
少し名の立つもうれしき若ざかり　（同　八）
逃げた晩宵に長うた二度通り　（同　九）
ふられた夜どうしてくりよと考へる　（同　九）
出來た奴遠くへのいてちやんと居る　（同　一〇）
來べき宵なり櫻から毛蟲下り　（同　一三）

手をとると片手で櫛をふかくさし　（同　一四）

之等は女人や素人の戀であるがこれにもうがつた所が十分ある敢て同時代のもの計りではない、矢張り戀の題材をうたつた史上又は傳說上の人物をつかまへても

鵜とまあどう一つにとあやめ云ひ　（拾遺　安永）
いづれとはすこし菖蒲の不足なり　（同　明和）
よい鵜さなどとより政どくづかれ　（同　拾遺）
白齒の殿御さとあやめうらやまれ　（柳樽　一九）
うれしさはあやめ白齒の殿を持ち　（柳樽　二一）
あの時は氣が揉めたよと菖蒲言ひ　（同　四一）

は賴政對菖蒲の前、

白拍子あほうらしいと四五枚見　（拾遺、拾遺）
陣太鼓うたせて見なと白拍子　（同　同）
富士川で三絃を折る白拍子　（同　同）
白拍子毘沙門さんへなどとしやれ　（柳樽　三）
白拍子口說のあとで和睦をし　（拾遺、同）
（同　柳樽、二）

つめるにと透き間をさがす白拍子　（拾遺、明和）
降參の顔をなぐさむ白拍子　（柳樽　一）
白拍子手柄をしなと着せてやり　（同　三）
白拍子後生を願ふ風でなし　（同　二一）

は平家對白拍子關係、

祇女が母やり手のやうな口をきゝ　（拾遺、寶暦）
うつり氣な坊主と嵯峨で悪く云ひ　（同　明和）
世話やきも西八條にこり〳〵し　（同　明和）
母親は祇王が供につれはじめ　（同　安永）
おのしもしたれはせぬかと祇女が母　（同　安永）（柳樽　一五）
琴箱を先へよこして祇王祇女　（同　天明）

は祇王祇女對清盛この關係である。此の第一、第四、第六句は江戸時代の藝者が呼ばれる時は三味線箱が先へ來、やり手めいた母と稱する女が藝者に伴つて來たからのうがちであり、第五句目の『おのしもし』の句は一時江戸に流行したお妾の小便組――先方から仕度金をとつてお妾にあがり、寢小便をしつゞけてお暇になる一種の仕度金や手切金の詐取をした不健全分子――に想ひをよせて清盛から捨てられたのをうがつたのである。

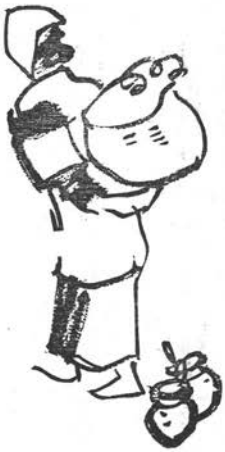
此他小督とか常盤とか巴とか阿古屋とか　（參遺、寶暦）
帶までもより合つてとく十二段　（同　拾遺）
十二段三歩らしいが琴をひき
と云つたやうな義經對淨瑠璃姿の姿態、
お妾は故事を云ひ〳〵濱で舞ひ　（拾遺、安永）
舞の内辨慶も出て船の世話　（同　同）
「柳樽十一編には中七が「辨慶は」となつてゐる」

辨慶は心中させぬ札を立て　（同　寶暦）
あの通りだと靜へは波を見せ　（柳樽、八）
心中を武藏とう〳〵祈りのけ　（同　一四）
鞘の毛をむしつて靜叱られる　（同　三二）
鞘の毛を靜こは〳〵なでて見る　（同　三七）
陀羅助をのんで靜は癪をさげ　（同　三八）
陀羅助をれだられてゐる四天王　（同　四五）

の靜對義經の句。曾我物の十郎對虎御前、

勾當の内侍で番が大くるひ　（柳樽拾遺、明和）
官軍の惣大將は朝寢なり　（同、安永）（柳樽　五）
ひとりでにほろびやせうと内侍云ひ　（同　天明）
楠が來るとはうきを内侍立て　（同、同）（柳樽、三〇）
こびりついて、楠に留守といへ　（同　同）
（此句柳樽三〇に下五が「留守といひ」となつてゐる）
楠がどうかしようと内侍云ひ　（同　同）
なからはんじやくで義貞ずるけ出し　（同　同）（柳樽　拾遺　六）
勾當の内侍因果と美しい　（柳樽　六）
楠は美しいのをたておろし　（同　九）
勾當の内侍鎧を引つかくし　（同　一一）
筑紫までどう行かりようと内侍とめ　（同　一二）
逃げたらそれで善いわなと内侍とめ　（同　二八）

の勾當内侍對義貞の關係の如き軍記物語や謠曲や戲曲に現はれた有名な人物は何處迄も俎上にあげてうがちの氣分で眺めて行く。獨り戀ばかりでは無い凡ゆる生活の面も川柳にとり入られること輕快なうがちに著色されてリプレゼントされる（以下次號）



川柳塔

○　川合舟々

令妹を失はれし源坊君へ（一句）

春寒ししつけのまゝで殘される
息子とついてはいる北風
二十四へ母手拭を當てさして
はたから見てるこ叱られ通しなり
一こ先こ云ふが煙を吹くばかり

○　酒井駒人

井戸のあるここを聞いてる曲馬團
孤兒院をなぐさめてやる雪模樣
看護婦に代診なにか言つて立ち

○　庄萬よし

濱に積んだ鯨の肉に雨が降り
享樂の夢から醒めた十姉妹
背中までさすつて且那人がよし
父の手で高壓的にシップする
子に話す病理は少し嘘を交ぜ

○　安井ひろし

お常を悼む（一句）

此頃はあんまり酒も飲まないよ
働く氣になつて居るのをまた起し
寢て居ても注文の來るありがたさ
あてにした内職金にならぬなり
醉ふて戻ればお茶屋からせいぼ
辭書つくる人の根氣の偉大さよ

○　三好革郎

西園寺公のお花さんに

人形が人になるのに非難され

○　西本三笑

正直に行先言へる年になり
停電にさのみあはてぬ差し向ひ

○　横田眠聲

其の誤解しばらく逢はぬ事にきめ
夢に見るなごとは戀も初手の内

六疊に三疊愛の巣をつくり
私にも子ありお互様の事
月を見て泣いてゐますと女氣の

太田朝陽

○

おのろけを言ふ友達は遲れて來
十姉妹十羽死んだと云ふ寒さ
お妾の今日も一時を湯屋できく
女關で嘘の返事を聞いてくる
鈎鐘のおろされたのは賣物か
嘘かほんとか分らぬだけがおそろしい

松盛琴人

○

氣をかへて機嫌取るほど女なれ
たよりない方と云はれて色男
故郷を話し合つてる乳母と下女
街道は寂寞としてお支度所

岩本素人

○

嫂の心盡しに醉ひました
資本主義打ち倒すのに金がいり
むつとして寢れば女房の寢言なり
逃げられる丈け逃げる氣の船着き場

竹内多聞

○

花に突込む目白の嘴の上品さ
此のめしに何で感謝が出來ぬのか
ある日ふとりんきせしめんはかりごと

岩崎柳路

○

幕合ひに天勝の年考へる
庭いじり恩給の事ふと思ひ
妻君の様なのも居る女子師範

橋本二柳子

○

雀雀俺を恐れて逃げるのか
あの宿へ若い夫婦がはいつたぞ
いさかひが止むと電燈がともつてる
街の灯が郊外電車に動いてる

宮本銀砂子

◇

明くる日は冷たい理智が待つてゐた
コンバクトこの間にと言ふ姿にて
たゞ醉ふて輪入超過は忘れたり
いつ怒る顔とも見へず牛歩み
遲雷針陽に映ゆるのは無駄なこと

中野柳陽

◇

ビスケット一つに象の輕るい足
空瓶のかるい心をならべられ
頑丈なだけの踏臺それでよし

安西杏三

◇

少うしは遊んだらしい唄ひぶり
泣くなとは君も矢つ張り他人だね
何時迄も他人が死ぬと思つて居
ヒヤシンス山の向ふは雪らしい

犬だつて顔色位讀むよ君
君の居た窓明々と電氣つき　中見光路

◇月給の後に子の嵩殘りけり
人足の袴メリヤスにゆつと出る
門を女房がして宵寢なり
ねんねこは母の心の姿形り
うちでした散髪とうぎう裸にし　水谷鮎美

◇櫻咲く話ぎびんへ水をさし
叱咤ばかりに一言も解けざりき
下女三十に近く燈下に膝を折り
べちやんこの鼻へ化粧の鮮かさ
ひさ〳〵に飲めば肴を食べ過ぎる　中澤濁水

◇砲列を敷いてるやうに貸車
用談をお茶とお菓子に遮られ
財布からたよりなく出す人の錢
使錢吳れる女房の愚痴がつき
舟遊び竿を片手に猪口を受け　松丘町二

魂と影とに別れ寢るとする
無氣味さは含み笑ひで蟇がゐる
ごの戀も未完のまゝよ枯すゝき
腹這ひぬ陽のいろの青きさみしさに

◇人事のやうに思へぬ娘の死
アンテナは高く妾が一人住み
いつの間に來たのか母の聲がする
講元は泥鰌掬ひをやつてのけ
實直な男の腕にすがらんか
氣樂さは同じやうだが一人缺け　水田黄彩

◇藏の壁子供のたけによごれてゐ
鈎鐘の響しやくつて鳴つてゆき
春の風子守の唄をのせてくる
すつきりとして蛇の目傘よく似合ひ
獨り者寢てゐたまゝで不在なり
嫁いでもまだ桃割れに結ひたくて
妹にして下さいと諦らめて
靴をぬぎ〳〵みかん轉ばしやり　兼重白鷗

◇御神橋其處から首に風をうけ
病上り鉢植の巢をのけて見る
一番に遲れてしつけ糸をとり　森田美太郎

◇うゐ死のかまきり二つ芒の穗
死ぬる氣へ髪や着物を賞められて
豪壯に夕陽を拜む蟹一つ
髪結ひに來る妓の頭小さく見へ　鳥田翠峯

ブルジョアの眞似をしたがる娘にて十姉妹人の心をさもしがり　◇　猪野燕柳

暴落を知らずや十姉妹　子澤山

大臣になつて笑はぬ人にされちゝ嘘も交ぜて藪入うらやませまだ嘘を信じる妻のいじらしく　◇　石川双葉子

月給日またいゝ聲を出しに行き

寫眞屋に衣裳を借りてまで撮し

あんこうのすがたが見えぬ今朝の雨

居馴染んで庭の手入れを屑屋ほめ

派手な名は廓へ殘しごりよんさん

借り貸しは智慧だけにしてつゝがなし　◇　朝田新水

冗談の種もつきたか目をつむり

初雪を子供に見せに寒う立ち

洗濯に女の姿勢崩されれる

素顔見て日光浴をすゝめられ　◇　本田柳一路

自惚の顔に女給は馴れて居る

かけ引を忘れ洋酒の味を賞め　◇　桑原京郎

友の妹逝く（一句）

夜風がまだ寒いトンビに入れてやろ

孝行にいつまで貧乏附き纏ふ

凡夫同志に肩書が要り

戀よ戀　戀は揮發にさも似たり

粒々集

○　御影　長崎柳秀

總立ちの中に舞妓はふるへてる

華やかに遲刻して來るタイピスト

病めば食へ治れば控へとけと云ふ

花束を持つにも娘しなを見せ

裏切つて主家の敷居を高ふ見る

天拜の盃の出るお正月

床の間に梅のかほるも久し振り

箸紙へ内政と書く面白さ

○　大連　佐々木三福

海岸を埋め海岸を埋め酒の街

○　大阪　塚崎松郎

黑ごけの屍体を負ふて行く如し

水舟に冬の名殘りがたゞよへり

桃が咲く藥貰ひに行く途に

上役を見舞に行けば揉ませてる

不義者を見附けに雨を冒して來

そこはそれ獨り身ぢやもの戀ぢやもの

氣心が知れる頃もう人の口

よう評さしさくれやした引祝

月評【前號】

路郎、紋太
山雨樓、葭乃

近作柳樽　路郎提出

親として洋行までもさしたのに

虛白

山雨樓……息子が死んだのだらう。親として何でも出世さしたいと思ふ心から大學を卒業させた上に、種々心配して洋行までもさせたのに、歸つてからか、或は外國で不幸不歸の客になつたのか分らないが、兎に角洋行までさせたのに死んで了つたといふ淋しさが表はれてゐる

讀んでゐると「さしたのに」で切つてあるところに餘韻があり「洋行までも」の「までも」が子に對する愛着から社會を呪ひ社會に怨みを言つてゐる感じが出てゐる。作者の實感句か、作者が第三者としてこうした事件を見て作つた句か分らないが、此の作者の他の句を見ると一寸人間味のある句が多いので、第三者の立場にあつて咏んだ句だと思ふ。

僅か十七字の中にこれだけの內容を表はし讀む者に種々の事を考へさせ得たことは、川柳の持つ味として誇るに足ると共に作者の手腕の凡ならざるところ、殊に餘韻のある手法はお手柄……。

紋太……此句を一口に言へば物足りない句だ。此句を讀んだ時、理解のある金滿家の父親が息子に對する不滿から何か悔んでゐるといふところまでは想像される。然し洋行さした息子が死んだといふ風にもとれるが、又息子が生きてゐて、父親と思想が合はぬといふ意味にもとれる。「洋行までもさしたのに」といふところに思想上の爭ひが父親を惱ましてゐるといふ風にとるのが妥當ではないかと思ふ。

親の對照としての子がどういふ工合になつてゐるかといふことがハツキリ讀む者に想像させ得ぬところが此句の欠點で……も少し事件の內容を想像させるところまで言つて欲しいのである。こういふ風に仕舞ひを言ひ切らずして止めるやうな句体は餘程うまくないと物足りなくなるのは當り前だと思ふ。

山雨樓……紋太さんの言はれるやうに父親が惱んでゐるといふやうに取れぬでもないが、假にさうであれば今少しく思想とか事業とかをほのめかしてないと分らない。親と子と、そして洋行といふ事のみが具体的に表現されただけであるから思想上とか、事業の經營とか日常の生活ではなくして、子の一身上に重大なる變化又は轉機を見たと取る方が穩當ではないか。

紋太……僕は「學校へやつたのに」といふ程度ならば息子が亡くなつたといふ意味に取れるかも知れないが、洋行といつてあるのでこんな動く場合の句は思想の方に取るのが當り前のやうに思ふ。

路郎……作者は兎に角洋行中の死亡とか思想上の衝突とか、事件的な事柄を咏んでゐるのではなくて、親の惱みを直截に咏つたものだと思ふ。

山雨樓……惱みといふことが適確に意識されない。何を惱んでゐるのか、どう惱んでゐるのか分らないが、惱んでゐるといふ風に取るより息子が死んだと取る方が比較的ピンと來はしないかと思ふ。

紋太……さうですれば、たゞ親の惱みだけを言つて、それ以上の想像を讀者に起させない

ところが此句の物足りないところである。

路郎……親の惱みの原因は 讀者の想像に任せて良いと思ふ。此句はその惱みを表現する上に於て、リズムで生かした句で「さしたのに」といふ下五の餘情が此の句を生かしてゐる。事件の內容は作者自身には分つてゐるのであるからそれは 第三者の想像に任せるといつた行き方である。川柳は事件の內容を凡て表はさなければ 完成されないといふものではなく、作者の心境の一縱斷面を摑み出しただけでも立派に句をなすのである。小說や戲曲と違つて 短い詩型の中に事件的に凡ての物を盛り切ることは寧ろ不可能である。

句の表現上技巧が少なければ 少ないほどさう言つた句が多くなつて くるだらうと思ふ。此句が作者自身親である場合には親としての氣持が十分に表現されてゐると思ふ。

此句を讀んで物足りなさを感じる人は それだけに購ひ得ない人で、これだけで十分他の人の心の裡に 或物を再燃させる力があると思ふ。紋太氏は作者の持つてゐるものを事件的に第三者が感じ得なくては いけないと言はれるやうであるが、しかし此句をみるのに事件を表現するのが目的ではなく、自分の惱みを表現するのが目的であるから、こう云つた味み方で良いと思ふ。とは云ふものの此句が惱みを表現し得た 完全な句だとは言へない。句をすべて事件的に見たがるのは從來の川柳家の態度である。

紋太……作者としては 第三者に事件の發展を示すことに殊更努力する 必要はないかも知れないが…… 結果として第三者に事件の內容がよく分るように 表現せらるべきだと思ふ。句を主として觀賞する場合は第三者としてさういつた要求をするのは 自然である。この意味から此句は物足りないといふ感じが起る。

山雨樓……スケッチ的な川柳に於ては 事件の焦點を摑み出して さらに活躍した種々相を現はして 讀者に聯想を起させる手法は歡迎されてゐるが、此句のやうに或る感情を主とした句にあつては リズムは相當尊重すべきである。此句はそのリズムも出てゐるし作者の感じも受取れるが但し、多少フレッシュさがないといふ非難がないでもない。

紋太……假に之をまア句としてもよし、獨白としてもよし「親として洋行までもさしたのに」と言はれると、息子さんがどうかなさつたのですかと聞きたいやうな 氣持を起させはしないか。

要するに僕の物足りないといふ原因は「親として」の上五が直ぐに子の行動を思はずに居れないやうな 客觀的な言葉を使用してあるから、子の行動を知りたいといふ氣持が起つて物足りないと言ふ感じが起るのである。こふいふ風に事件の內容が 種々に取れると此作者と同じ境地にある人だけにしか 此句はぴつたり感じ得ないのであつて、僕が作者と違つた境地にある場合には、作者の獨語ぐらいにしか思へない。

路郎……他の詩歌でも小說でも同じで、作者と同じ境地にある人か、又は想像力の非常に逞しい人にはそい作品が 強い感激を與へるものである。然し名作であれば一般讀者をして作者と 殆んど同樣の感じを起させることが出來るのである。此句がそれほどの名作でないから物足りなさを 感じる人があるのではないかと思ふ。

紋太……事件がスッカリ 分つた場合でも事件を聞かされる者にとつては、作者の獨白ぐらいにしか感じられないと思ふ。眞に共鳴するのには骨が折れる。

路郎……私は此句を 事件的には考へたくない、たゞ山雨樓氏の言はれるやうにフレッシュな句ではないと思ふ。

紋太……さうですね。極く古い 行き方ですな。

路郎……此句の生命は 事件的に言はずに人間の惱みの一部を切りとつて 心境の一斷面を見せてゐるところにある。句を生かしたのはリズムの力である「洋行までもさせて死に」といへば、つまらない句となるのを「さしたのに」といつた下五が非常に力强く働いて此句を立体的に生かして居るのである。

紋太……兎に角惱みの句で あるといふことには同意することが出來る。

山雨樓……此句は 亡くなつたくらいに取つた方が感じがしつくりくると思ふ。

紋太……洋行といふ言葉があるので さうは取りたくないと思ふ。

葭乃……皆樣は此句を非常に 難しく御考へになつてゐると思ひます。洋行までさした子が歸つて來てから 極道を始めて親に心配

をかけるとか、何か摑んで歸ると思つてゐたのに何も摑んで歸つて來なかつたとか、親が子供に對して抱いてゐた期待を裏切られたといふ不滿を味ひた句に過ぎないと思ひます。山雨樓さんの言はれる樣に亡くなつた場合には亡くなつたといふ前書がなければ分らないと思ひます。またしも紋太さんの思想の衝突といつた方に取る方が穩當ではないかと思ひます。

山雨樓……さう言はれると成程さうかも知れない。然し此句はリズムが大變よく、技巧を弄せずして自然に惱みがよく出てゐる。

紋太……作者の惱みだけは分る。事件は分らないが、作者と同じ溜息ぐらいは吐いてもよい句だ。

山雨樓提出

たまさかに愛想を言へば聞き違へ

二　南

山雨樓……前の句と異なり分り過ぎる句であるが、味つてゐると人物はハツキリしてゐないとしても、兎に角人間生活の上に於て人情味のある面白い場面を發見してゐると思ふ。此種の事は皆がよく感じることで、事件的にはさう珍しい事ではないが、たゞそれをパツと言つて了つて、そこに作者の小主觀が少しも混ぜつてゐないところに一種の味があると思ふ。

近來川柳界で滑稽味といふことが問題となつてゐるが、事件的滑稽味でなく、日常の有り觸れた生活の中にこういふ人間味のある面白い場面を捕へ來つて讀者にさうした面白味を感じさせることは川柳のみが持つ特種の味ひだと思ふ。穿ちを求めんが爲めの穿ちに陷ることは川柳の上から言へば邪道である。此句の作者は穿ちを平素から忌み嫌つて居る人であるからさういふ考へ方をするのは、穿ちを排斥する私の杞憂かも知れないが穿ちを求めるといふ氣持からこふいふ面白さを見付けたのではないかと一度は思つて見ましたが、よく味つてゐるとこの事柄が珍しい事柄でないだけにさうではなく、一語にして言ふならば面白い所を摑まれたと言ふのほかはない。

路郎……此の句は主觀の句で作者は平素無口であるか、又は眞正直な人で餘りお愛想を言へない質の人である。その人がたまさかにお愛想を言つたところが先方が聞き違へたといふところに一種の淋しさが出てゐると思ふ。その淋しさは自分の野呂間さ加減、世の中のイヤにつかない自分を自嘲した淋しさを獨り感じて味んだ句だと思ふ。單に第三者を見て穿ち式に味んだものではなく、作者自身の境地を味んだ句と見る方が味はひがある。

紋太……自分の野呂間さ加減を自嘲した氣持に取れば句として面白いとは思ふが、此句から受ける感興は極く短かい時間しかもたない。成程そんな事もある。自分にも覺へがある。面白い句だと思ふ。けれどそれが短時間しか續かないのは、表現の仕方にその原因があるだらうと思ふ。自嘲の心持をもつと強く表はして貰ひたいと思ふ。此の表現だと一寸面白いなあと感じる程度で、危なく普通の句に終つて了ひさうだ。今の川柳界で普通に用ひられてゐる表現法だと思ふ。今少しく工夫される必要がありはしないか。

山雨樓……川柳の面白味、滑稽味が往々事件的の面白味や穿ち得て妙だとかいふ事を安價に求め易い傾向が句會などに多い。さういつた川柳家が一寸した思ひ付きか穿ちとかを求めてゐるのに比較して此句もその行き方をしてゐるのではないかと杞憂を持つて見れば見られないこともないと思ふが私は此句は自分を見詰めた句、人間生活を見詰めた句として實感(面白味のある)がよく表はれてゐると思ふ、こういつた所に川柳獨特の或一面の良い味があるのではないか。殊更に滑稽味や穿ち、或は技巧を弄す、小主觀を加へず、有の儘を有の儘にさらけ出してゐるその素直さにたつたこれだけの一寸したことではあるが微笑みを浮べ、面白さを感じない譯には行かない。こういふ境地を味はひ又作句する時には遊戯的でなく、餘技的でなく、人間生活そのものであり、自分の思想の足跡を眞面目に見詰めた者でなければ捕へられない面白さである。喝采を博さんが爲めに作句すると言ふ邪念のある作家には到底求めて得られない境地だと思ふ。……良い意味に解釋してゞあるが……。

川柳塔　紋太提出

辨當と工夫だん〳〵遠くなり

銀砂子

紋太……僕はこんな句が好きである。

路郎……客觀句として成功してゐると思ふ。工夫と辨當と言へば何だか慘めな生活狀態を想像しさうなものであるが、此句にはそんな感じが少しもなく何だかノンビリとした麗らかな氣持が出てゐる。空が晴れてゐるこささへ想像される。

山雨樓……此句に就いて自分の杞憂することは句の睨ひ所が作者の主觀に於て穿ちにあるのではなからうかと思ふ點である。即ち辨當を喰つた後の工夫が作業を進めて行くに從つてだん〳〵辨當から離れるといふことの面白味を穿ち的に發見したことが主であるやうに思ふ。然し作者の他の句を參照して徒らに作者が穿ちの方へばかり進んでゐるのではないといふ事も受取れるので、これはホンの輕い氣分で客觀したものであらうと思はれるが、川柳では穿ちといふ事がともすれば嫌味を伴ふものであるから作句上心すべきことだと思ふ。

紋太……此句から受取れるノンビリとした心持が僕は好きである。讀む者の氣持を亂さないで、異常な昂奮を起させないで、穩やかに味はゝさせるところに僕の主義と合ふものがある。

路郎……山雨樓氏は穿ちといふ事を非常に排斥されてゐるが、從來の川柳の立場から言へば穿ちは川柳の要素の中でも一番大きなものの一つであつた。今日我々の句はそれらの穿ちに對して從來の川柳と同じ樣な穿ちに行くといふ事はあきたらないけれども、我々の咏んだものに自然に穿ちが橫溢してゐる場合にはこれを決して排斥する必要はなからうと思ふ。穿ちは人間の感情の一つであつて所謂穿たんが爲めに穿つといふ事は排斥しなければならないけれども、我々の咏んだ句の中に自然に穿ち味が含まれてゐるといふ事は決して不可とする事は出來ないと思ふ。これは獨り川柳だけでなく、他の文藝に於ても矢張り見出せるものゝ一つである。私は遊戯的に穿たんが爲めの穿ちを排斥するけれどもさうでなくして穿ち味の同時に含まれたものに對しては超穿ちの句としてこれを我々の川柳の一要素と見たいのである。それで工夫の句などは一寫生句として私は取つたのである。そこに幾分の穿ちがあるとしてもそれは作者が穿たんが爲めに穿つたものとしては見てゐないのである。さう見ることは多くの場合酷な批評であると言へないであらうか。殊に此の作者の他の句「泣き伏したその襟足は强かりき」「剃刀の下にゆだれた顏のごと」などの句を見てもさうとしか感じられない。

紋太……僕もその說には共鳴を感じる。つまり川柳の味ひ方見方が從來とは異なるのである。穿ちや輕味といふものを覗つて即ち目標にして句をつくるときは自分の脚許が浮ついてくるのである。目的に惹かれるから自分を失つてゐる。だから句に落付がないことになる自分の脚許をしつかりと地に落付けてゐて、さうして生まれた穿ちや輕味であつたら作品の結果は同じ樣であつても句に危けがないと僕は信じてゐる。この句は偶然に出來たものか如何かは知らないが、危な氣のない落つきを僕は感じさせられる。さう言つた脚許が地についた句でさへあれば假令激越な感情や戀を咏つた句でも異常な嫌やな昂奮を感じないで その儘ぴつたり僕に受取ることが出來るのである。兎に角この句が徒らに僕の感情を搔き亂さないで其儘なりに受取らせるところが好きである。（革郎記）

川柳雜感

革郎

▼川柳は文字で表現する藝術である、だから川柳家は文字に對して敏感でなければならない。

▼一句の中に使ふ文字は少ない、どんな字を使つたら一番よく自分の感興なり、詩情なり、思想なりを表現出來るかを考へ、苦心する必要がある。

▼句は人格である。人間を作ることが根本だ

▼人間を作るには本を讀む事が一番だ

▼どんな本を讀んでもよいといふ譯には行かぬ。本は撰まなければならない。

▼よい友達を持ち、お互に良い影響を與へあふことは人格を作る捷徑である 友を撰べ

▼物の感じ方に自分の個性を出せ借物は身に合はない選に入る入らないは問題でない。

詩漫

漫感こもぐ集（一）

長野晴濱

こけた自轉車

秋の日の雨あがり
乾ききらない街に爽かな風が流れてゐた

板硝子を背負つて走つて來たほんさんの
自轉車が
ぬかるみで滑つて、こけた
がちやん　ばり、ばり
幾枚の板硝子が割れ
甲羅を引つくりかへされた龜の子のやう
に
ほんさんはもがいた

どこからか、いつか
殆ど忽然と

二人の勞働者が出て來た
ほんさんはすぐ
泥だらけの體を起されてゐた

瞬間
私は激しい怒を感じた
實に激しい怒を

瞬間
實にはつきりと私は
ほんさんの背後に
板硝子の代りに
彼の主家を見
彼の親の家を見
そのまた背後に社會を見
その社會の仕組を見せつけられた

莨盆

大きな私の机の上に
古い、古い
飾りけのない莨盆が一つ
常に乘つかつてゐる

二十數年前
學校の實習に友達が造つて
私に呉れたものだ

日の照る日は
莨盆の澁色が澤を含んでゐる
じめ〳〵する日は
それが妙に沈んでゐる
春風秋雨二十年

もう十何年逢はないが
友人間で
その友達は評判がよくない
ごうもほめる人が少い

だが賣盆は依然として
中學から專門を出るまでの
その學生姿を
その艱難をものともしない
堅忍な
てきぱきした彼を思出させる。

と同時に
私にはその時分の自分が思出される
殊に一つの或る事を――――

その友達から
永遠に預かる事になつた、だが貰つたの
ではない漢籍の一堆を
私は彼に斷りなしに
金にして終はうとした事がある
結局は斷つて
斷つたが故に彼の銀時計までつぎ足させて
一緒に賣つて

私の役に立たせる事になつてしまつたが
――――

そんな外にも
俺ももつとずるぶん友達たちを惱した事
がある
大きな口がきけたものでない――――

そんなことを思ひながら
私は何だか悅しいやうな氣持で
その賣盆にぢつと見入ることがある
その友達の造つた賣盆に

仲　間

おのれ泥棒！

昔おほえの
天神眞楊流
卷物一卷にもいたらぬところ
怪しい冴ゑがまだ在つたか
意外に難なく
ほろ〳〵の大男を取つて押へた

畜生！
食はねえで
弱りきつてるんだ
それで負けたんだ
だが何で君は
何か吳れないんだ
何故吳れないんだ、何故！
權威あるものの如く
泥棒が呻いた

それでわかつた
自分が思の外强かつたわけも
この男が盗まんとしたわけも

實は取られると困るんだ
取られたら買へないんだ
いつか彼は言譯をしてゐた

すると君も
僕とあんまり違はないんですね
仲間みたいなもんだ
こりや失敬しました

仲間とは……
咳いて彼は泥棒と別れた
いや、仲間かも知れない。

募集句

卒業

驚く程句が集りました事は御同慶に存じます從つて甲乙の附けられない類吟が澤山ありましたのは一つを採り餘を捨てました御用捨を願つて置きます

卒業へ縞の着物が出來上り(佳) 桃妖子
卒業の晩ト宿屋のさんざめき 水聲
卒業を前に奉公口が出來 粹狂
あどけなく子供が笑ふ卒業日 離楓
卒業は校門を出て振り返り 新生
卒業の兄髪の毛か目立つなり 雪峰
銀時計貰つて嫁の口がふえ 吉朗
卒業を近所それ程にも言はず 青水
卒業をしたのにしてはぬるい奴 新一郎
開業醫聞けば卒業したばかり 鐵洲
びりつこで卒業をして生きて(佳) 武藏坊
卒業を控へて父は破産なり 無心
優等で夕刊賣は卒業し 柳狂
金で買ふ卒業證書へ就職難 北仙
卒業をすれば島田に結つてゐる 珍郎
講堂に淋しく夜學卒へる式 風鈴坊
卒業へ伯父の緣談氣かかはり 孤舟
割烹服卒業丈けの味がつき(佳) 陽喜亭
卒業はしてもごくごうやまぬ 王二郎
卒業を前に參者のあじを知り 秀郎
卒業の娘田舍へ歸り來ず 呵々子
卒業の紀念寫眞に二人減り 庚子
卒業をして舊友を思ひ出し 玉仙
かたまつて卒業の日の門を出る 白鷗
校長をなつかしくみる卒業日 東狂子
卒業へにはかに嫁の口がふね 一蝶
卒業の寫眞先生かこまれる 秀甫
卒業は一ヶ月前に嫁になり 芳靜
卒業をして中折がよくうつり 光哉
卒業を道具に嫁を探してる ひさし
卒業をしてから袂氣にかかり 紅陽
社長から卒業の日を尋ねられ 如水
よその子はいつの間にか卒業し 鯉友
卒業の理窟を母はもてあまし 眠聲
卒業へ伯母の結ばせた高島田 里十九
落籍されるまで卒業に盡すなり 觀月

川柳家の戸籍調べ

□ 係 ひろし生

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所 (五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)好きなタイプの女 (九)自信の句 (一〇)川柳以外の趣味 (一一)配遇者の有無 (一二)嫌ひなもの (一三)川柳に手を染めた年月

お馴染の戸籍調べを引きつゞき掲載致します。御照會申した向きは左記へ御返事下さい。

大阪市南區安堂寺橋西詰・安井寛宛

(167) 長谷川一徹

(一)長谷川成一(二)一徹(三)成泉(四)大阪醫科大學(五)明治廿六年八月四日(六)醫(七)あまりに多數にあります(八)自分を好いて呉れるすべての女(九)何れと書きあげる事が出來ません(一〇)勝負事以外(一一)有(一二)無(一三)昭和元年

(168) 安西杏三

(一)安西猥(二)杏三(三)默公(四)阪急沿線螢ヶ池力根山療養所(五)明治二十九年十一月十日生(六)無(七)路郎・日車、半文錢、三太郎、宵雨、諸氏の句(八)澄んだ瞳の聲の綺麗な理智的な女 九)まだありません(一〇)讀書、繪を見る事、散歩、旅行 一一)有(一二)蛇、僞善者、所謂ク

卒業も待たずに嫁に欲しがられ　雨迷
卒業をまつてゐるとは知らぬな　仙蛸
卒業をして病弱に日を送り　陽春
大學出養子の口がありは有り　露斗
末の子が卒業をして樂隱居　種次郎
卒業は鬼の首でもとつたよう　九牛
卒業をすれば奉公に出る次男　新水
卒業はまだありつかぬこの世の　突支り
卒業が二年遲くれた選手なり　義情
卒業をすれば坊ンちは祝はれる　九柳
卒業の寫眞へあざな笑はせる（佳）　一鐵
卒業は嬉れし涙の母に逢ひ　逸紅
卒業の喜びもなく母は逝き　與詩夫
卒業は頭をわけて母にあひ　丹頂
卒業の日はおとなびて歩くなり　春公子
卒業を待ちあぐんでる許嫁　幸泉
卒業の明日は子守にやられる身　雅流
卒業の噂仲人押かける　菊路
二人共卒業をする許嫁　申哉
商業を卒業させて番に置き（佳）　草明
卒業へ隣からある嫁の口　晃卓
卒業式に間に合ふかみが延び　狸庵
大學を出て若樣は村役場　花蝶
卒業に母と娘の禮詣り　伴内
卒業へ約束が出來針仕事（佳）　同
卒業をすれば選手は賞はれ氣（佳）　緑之助
卒業をほかに呑む日が續くなり　同
こはかつた先生も居る卒業日　太閤
卒業の日に二越でねだられる　同
卒業を手際な書司が出來（佳）　秋風
卒業か寄つて履歴書かいてゐる　同
學士樣先祖の業か氣にいらず　琴人
卒業は一圖に親を古く言ひ　虚白
卒業が世間を狹く遊むでる　同
卒業は母校に殘す樹を連び（佳）　一笑
卒業をまつ身袴が破れてる　同
母ひとり位と卒業思ふなり　太路
卒業へ暫し絣の日が續き　同
卒業をする迄姉の手内職　泰平
卒業をさせたが後家の噂なり　同
卒業も近く洋服屆けられ　翠峰
卒業に教師のほうも涙ぐみ　同
卒業の寫眞日附もかいてくる　ささ舟
先生を拜む氣になる卒業日　同
卒業は書棚を賣つて旅費にする（佳）　風柳坊
百貨店卒業生を募るなり　同
卒業のその日女が訪ねて來　愛波
卒業へ國の注文多過ぎる　同
なまちつか褒美もらつて貧に泣き　刀四郎
卒業の夜は活動へ父がつれ　同

リスチャン（一三）大正十五年一月

（169）　朝田新水

（一）朝田親市（二）新水（三）新水坊新喜樓（四）大阪府北河内郡三鄕村西橋波土山（五）明治三十三年九月六日生（六）本職麻苧軍需品製造、副業園藝養鷄大阪市外守口町樋ノ口千好園を經營す（七）澤山ありますが中でも松郎師の句風が好きです（八）現代式や丸髷でない髮を結ふた溫和な賢い女で中肉中脊の美人（九）まだ此處に發表するだけの句もなく今後益々句作に精進して誌上に發表する覺悟です（一〇）旅行寫眞芝居物ノ鬼集食道樂落語（一一）妻アリ子ナシ母一人（一二）煙草、勝負事、新小說（一三）昭和二年一月廿五日夜小生宅で偶會をやつてから以後投句する氣になり爾來勉強して昨夏より熱心に研究を續けてゐます

（170）　猪野燕柳

（一）猪野益雄（二）燕柳（三）燕雀、枯すゝき（四）南區鰻谷仲の町五四山岸美容院（五）明治卅二年十月十五日（六）理髮師（七）路郎先生の天井の低さも知らず子は生れ、其他先輩の句に澤山有人情美豐かな淋しい句（八）女らしさを失はぬ無口の淋しい耳のかのない女でなければ嫌（九）お藤の樣な勝氣な女（九）まだ卵のからを脊負つてゐますからおこがましくて云へません（一〇）野球、キネマ、脚本、女給は好

卒業のわが子見返る父兄席　智朗
卒業の兄をとりまく一家中　同
入社する靴が卒業式にゆき(佳)　高峰
級長が給仕になつて惜がられ　同
鉛筆を嚙むまま豫科を卒え(佳)　燕柳
卒業を前に息子はぐれはじめ　同
卒業をして菜つ葉服四角なり　玉政
卒業の春は嬉れしい伊勢參り　同
卒業の寫眞を娘ぬりつぶし　黄彩
小學も卒業せずに金が出來　同
卒業をして女學生女らし　寂郎
卒業をさせて娘の意見きき　同
卒業できまり寫眞をとりかわし　清郎
卒業の上の約束金を出し　同
卒業日赤飯をたく母は老ひ　千鳥
卒業をめつきり老けた父がまち　同
卒業證書母は佛へ供へてる　正春
卒業をかけて喜ぶ姉があり　同
卒業は奉公をする事にきめ　郊村
卒業の朝校庭は晴渡り　同
もう直さに卒業をする髪をわけ　吐露樓
卒業の正午から背廣服になり　同
卒業日級長日本髪に結ひ　我卵堂
卒業をすれば家風の娘なり(佳)　同
卒業へ一杯はよい叔父がさ(佳)　衣通史
卒業へ姉から聖書送つて來　同
卒業の寫眞をみせぬ許嫁　吟女
卒業へ何にが欲しいと伯母の文　同
卒業の當座早起き面白し　耿三
卒業をすればよい氣の質屋の子　同
卒業をした妹のをとなじみ　惡源太
寄宿舍の飯へ卒業指を折り(佳)　同
卒業の知らせ英語も交つてる　萩麿
卒業は下宿の飯にかしこまり(佳)　同
卒業の宴先生の隱し藝　鬼三
卒業の寫眞校長大寫し　同
卒業を君づけにする教師なり　柳哉
卒業は教師へ猪口をもつて(佳)　同
卒業はぶら〳〵として母がゐる(佳)　光路
卒業は肩身狹くも世話をうけ　同
卒業の翌日は理想の耳隱し(佳)　同
卒業は母と二人の家を借り(佳)　町二
卒業へネクタイを編む許嫁　同
卒業へもうこれきりの爲替が來　同
卒業はいつそ前垂掛けとなめ(佳)　毒仙
卒業へ後家一と息の話をし　同
佛壇へとものしてゐる卒業日　同
卒業を待たず母親骨となり　革郎
卒業を下宿の娘よろこばず(佳)　同
妹は兄の卒業まつてゐる　同

きませんが酒場の灯と氣分、主義者の著書(一一)決まつた女はありませんが四年越しのラバーと近く結婚の豫定(一二)モガ、モボ、喋る女男、地震と父、酒に醉ふてくだ卷く奴(一三)大正十四年十月第三回毎日川柳會「我儘」初めて投句「顔色を見て我儘は泣きじやくり」失名にて初めて活字になる

(171)　内藤土筆坊

(一)内藤楠雄(二)童謠園土筆坊(三)副島紫水、峨眉山人、詩朗(四)長崎市萬屋町三〇(五)明治卅七年六月四日生(六)旅行用具商、屋號日本商會なれどチツボケな住ひ、されど長崎隨一の目貫土一升金一升なる事受合ひ、一寸外れました失禮(七)澤山ありますから例を上げよと言はれると困りますが新星會諸兄の句が好き又叙景の句を好みます(八)何しろ小生が五尺五寸からある男なんですから…背はかなり高い方、束髪のよく似合ふ女が好きです、但しハイカラはイヤ(九)これと言ふ句のないのを悲しみます(一〇)讀書園碁、其他限りなし(一一)なし(一二)酒くどい男、オートバイの爆音、人參、蟇(一三)大正六年頃より面白いなあと思つて一人で樂しんでゐた偶々大正八年頃に書之助先生長崎日日新聞へ初めて川柳欄を創設さるゝや盛んに投書、翌年西柳樽寺となるや直ちに入會せり

結納もすませ卒業まつばかり　鮎美
卒業證書母から頂だかれ　同
親なしと言はれ卒業世にすねる　同
卒業の娘へ着物許り出來（佳）　蒼梧樓
卒業へ從妹を連れて母が來る　同
卒業へ下宿も豆飯をたき　同
卒業の事は女給も知つてる（佳）　柳秀
卒業の當座親仁と酒を呑み（佳）　同
田舍驛學士の歸る賑がさ　同
卒業は訓辭にあいた顏になり　同

佳句二十五秀逸一を標準として再選しました。

秀　逸

卒業をしてステッキが細くなり　琴人

ゴム靴

ゴム靴に靴下の穴ひやり　觸れ　町二
足袋のまゝ履くゴム靴の冷ふり　燕柳
ゴム靴も履けば身輕るな子供服　光哉
炎天にゴム靴はいて足がむせ　秀甫
ゴム靴で雪ボサ〳〵と靴の跡　紅陽
ゴム靴が演壇に立つストライキ　ひさし
よち〳〵と歩む笑顏のゴムの靴　玉政
ゴム靴の夜店下駄屋の前に出し　如水
ゴム靴の足元輕く歩き初め　清郎
ゴム靴は微行にもつて來に出來　千鳥
道ぐさをしてゴム靴の水溜り　郊村
ゴム靴のあまり弱きに腹を立て　革郎
先日の雨ゴム靴は泥のまゝ　眠聲
ゴム靴は洗つて置けばそれでえし　觀月
平然と雨中を歩むゴムの靴　柳秀

大島濤明選

ゴム靴の忘れてならぬ辨當箱　吐露樓
ゴム靴が强情に行く泥の道　菱明
貧しさはゴムの靴からしか〳〵と　雨蓮
どこからか兒犬ゴム靴くわえて來　黃彩
ゴム靴が一番よいと母同志　吟女
ゴム靴は火事場に少し躊躇ひて　九牛
ゴム靴は雨をおそれぬ歩きやう　蒼梧樓
ゴム靴のかゞとつぶして遊びに出　耿三
ゴム靴でワザ〳〵子供水に入り　惡源太
飛ばしりをあげて深ゴム先になり　突支坊
ゴム靴へ親方の聲大きすぎ　義情
ゴム靴も河岸ではかなり巾がき、　狸庵
ゴム靴で辛抱をする暮し向き　九柳
ゴム靴へ安いもんだと價を言はず　一鐵
ゴム靴に靑訓だけの歩調とり　逸江

時事吟回顧

石賀馬行

近頃、私はあまり佳い時事吟に接しない。その爲めか知らないが數年前路郎氏が選をされてゐた大正日日時代が憶はれてならない。あの頃は柳壇の先輩が本名や匿名で盛んに名吟を吐いて居られたので、大いに刺戟もうけ、發奮もしたわけである。そうしたお蔭かいつまで經つても忘れない。勿論時事吟は新聞もので專門雜誌には向かないがそれだけ利那的で痛快この上ない。いゝ時事吟に接した時の氣持は一寸筆紙では現はせない。今當時の切拔帳から少し斗り拔いて見ると。

衝突で調査用紙が四枚減り　半文錢
この頃は丁度、國勢調査時代で、電車事故を扱つた穿ちの各吟である。

書置と猫いらずとが殘つて居　路郎

三面の記事を扱つた句で、一讀失笑、且一脈のユーモアを覺えるではないか。

社頭の曉も待たず鯛二死に　楊柳木

社頭の曉は勅題で、鯛二は大歌所寄人であつた事は昔く人の知る所、當時これを讀んだ僕、是ある哉〳〵と感歎して了つた。

帝展で落ちて天下の秋を知り　楊柳木
南洋で珈琲まみれの生き佛　同

共に時事吟としては秀逸であらう。

帝展も一科も紋付には困り　路郎

は墨塗り騷ぎを詠んだもので讀者をして一讀三笑せしめたものである。

脱ぎ捨てた儘ゴム靴の兒が見ず　與詩夫
ゴム靴屋自分のはいた事を言ひ　丹頂
ゴム靴で霜を先づ踏む牛乳屋　鬼三
ゴム靴で田圃を歩く霜の朝　春公子
失業の足にゴム靴重過ぎる　幸泉
ゴム靴の子を取圍む片田舎　菊路
ゴム靴で出る日は町へ用があり　草明
ゴム靴へ朝鮮人のよく價切り　太路
ゴム靴がうつかり辷るものを蹈み　孤舟
ゴム靴に鱗點々光つてる　泰平
ゴム靴へ不景氣風が吹き募り　賀名芽
ゴム靴こわらじが並ぶ國の春　翠峯
ゴム靴を役場の庭に脱ぎ散らし　舟
ゴム靴で看屋路次の板をふみ　同
ゴム靴でよう〳〵一人歩き出來　秀郎
ゴム靴が愛らしく子の足に合ひ　愛波
ゴム靴は交る交るに蹈んで脱ぎ　同
ゴム靴がヒョイと止つた告知板　智朗
ほごの良で出て行くゴム靴屋　玉仙
ゴム靴の疲れは坂を降りきつて　白陽
ゴム靴の洋服ソット後へ乘り　一笑
絶頂へゴム靴輕く登りつめ　風鈴坊
ゴム靴も大分寄つてる爭議團　柳狂
ゴム靴の買手右撰り左擇り　北仙
ゴム靴を之れみよがしの支配人　盧白
亂雜にゴム靴のある家庭なり　壽枝女
ゴム靴の飛躍を見せる支那の藝　白人
ゴム靴は見榮も飾りもなく稼ぎ　光路
ゴム靴で只默々と稼ぐ父　秋風
ゴム靴をぬげば電車の子は靜か　武藏坊
ゴム靴是さけん計りにヒッたき　無心
雪解けの坂でゴム靴辷ること　青水
いろ〳〵の色でゴム靴賣れて行き　花蝶
空電車ゴム靴狹まう座つてる　吉朗
ゴム靴は和服に足袋に馴れてる　雪峯
ゴム靴のはち切れそうな足の巾　綠之助
ゴム靴をぬげば靴下もう汚れ　同
ゴム靴の歩調が揃ふ靑訓所　水聲
ゴム靴は遠慮のいらぬ水を蹴り　新生
霜柱やたらゴム靴踏みたがり　伴内

佳句

ゴム靴の何を蹈んだか深い疵　町二
ゴム靴で朝々大地踏みしめる　寂郎
ゴム靴の疲れきつてる砂埃り　眠聲
ゴム靴をはいて渡世の朝を出る　鮎美
ゴム靴に均一の札ひるがへり　吐露樓
ゴム靴に小供の好きな艶があり　菱明
ゴム靴へ切れるナイフを常て見る　衣通史
ゴム靴が臆ず臆せずビルディング　突支坊
棄てられたゴム靴疲れきつてる　重陽子

兎に角川柳時事吟が讀者に對して獨特の魅力ある事は事實である。

つい先日發行された週刊朝月昭和三年新春號の特別川柳第二席、一徹氏の松の内瑶風會もの　さばらず

なんか普通の川柳としても名句たるを失はないと共に、時事吟としても好箇のものであらうと思ふ。（昭和二、一二、一〇）

合本と殘本

「川柳雜誌」の「殘本」がまだ少し本社に殘つて居ますから、欠本があるため合本が出來ずにお困りの方には左の値段でお頒ちします。

第一、二、三卷殘本各一部金拾錢
第四卷　殘本各一部　金拾五錢
但し左の各號は欠本です
（一卷の一、九、二卷の一、〇、三卷の二、四卷の一）

殘本は極少數です至急本社事務所に御申込下さい又總布製裝金文字入り「合本」此際左の値段で御頒ちします。

第一、二卷　金五圓
第三、四卷　金三圓

ゴム靴の力も色も褪せてゆく　草明
ゴム靴の底ゐ二月の冷ゐがくる　孤舟
船べりにゴム靴の跡ぬれて居り　泰平
坂へ來て餘程ゴム靴草臥れる　愛波
ゴム靴　個性は寒暑よく感じ　北仙
ゴム靴が草臥れてゐる合宿所　琴人
ゴム靴で結構ですとゴム靴屋　壽枝女

大入

不二綱選

○　大入の頭の上で口を開け　觀月
大入と聞いて女房落付かず　菊路
大入の中をお茶子は斜に拔け　孤舟
大入の舞臺みんなを憎くがらせ　惡源太
大入の中を物賣泳いで來　耿三
斷られ大入札がうらめしう　一鐵
大入の御禮座長と替るなり　翠峯
大入の活動裏から見せられる　黄彩
後ろから押され〳〵て前へ出る　半哉
プログラム切れて大入續いてゐる　雅流
大入を出れば羽織の紐が無し　柳哉
大入は精一ぱいの筆で書き　幸泉
大入の札そこらへも霜の朝　春公子
大入の外からごなる野次馬隊　鬼三
大入に幹事草臥れ甲斐があり　興詩夫
大入の歸つた跡の豆の皮　義情
ゴム靴へバラスの一つ宛こたゐ　鐵洲
ゴム靴のいやでならない年に　水聲

五　客

元の艶見せてゴム靴雨を行き　小鳥
失職にまだゴム靴の餘命あり　新水
ゴム靴へ〳〵つゞく妙利の道　智朗
ゴム靴が鈍く光つて河岸の朝　東狂子
ぬかるみをゴム靴ぐちゃ蹂躙し　白人

不二綱選
青砥
岩崎
柳路

共選

滿員の席を大きく取る男　芳靜
大入の朝早くから並んでゐる　秀甫
大入に亭主も少し氣が動き　吟女
大入の書体は何處も同じらし　雨迷
大入を食つたやうなる子役の藝　我卵堂
大入の看板丈けの夜となり　光哉
大入はしれた事だと小屋の人　紅陽
大入の口上書きの字に力　慶三郎
大入の割に儲けたとは見ねず　鯉友
ねたまれる程大入がつゞくなり　秀郎
大入に行燈いつもより暗い　愛波
大入の下足に母と殘される　白鷗
命がけだつたと下足とつて來る　一笑
大入の中に此處だと呼でゐる　風鈴坊
大入の首の間へ伸び上り　琴人
大入の人數の中に我もゐる　さゝ舟
大入の中に白銅一つ持ち　鐵洲

笑話三捻

池邊生

三月本社例會に出席した、赤丹君の雅號の由來が振つてゐる。赤丹君と革郎君が革郎居で花札を弄した後、一緒に例會に出席した。赤丹君は雅號がない、電車の中で考へること一時間、赤埴探偵社に勤めてゐるので赤埴の赤と探偵社の探とをもちり、八々の赤丹にしたのであるんである。今に青丹も出來よう

○

雅號を變へることが流行してゐるが、至誠川柳會の人々は雅號なしで句作をしてゐる。阿形君のことをアケイ。靜海君をセイカイと讀んでゐる人もある。

○

糸屋町支部の連中が大阪時事新報主催の橋取り競爭に出るが、毒仙、舟々、赤城、翠峯の四君は揃ひも揃つた大食漢、箸を取つたらなか〳〵動かないと云ふ豪の者ハシ取りのハシが違へば一等疑ひなし

○

朝日會舘で開催されたフランス繪畫展の一情景。小出檜重畫伯が數人の美人と繪を見てゐる。安井ひろし君群鷄中の一鶴と見ゐる美人を的切り小出畫伯夫人なんめれと、目錄昼上におよび歡待これつとめること暫らく、やがて休憩室で小出畫伯からこれがわたしの家内ですと紹介されたのが他の美人、ひろし君目をパチクリさせて、「小出さんの美人に對する鑑賞眼を疑ふ」とは言はなかつた。

大人の臺詞はつきり高めたり　緑之助
大人の掲示淋しく懐ろ手　水聲
入替りこの大人の騒ぎやう　伴内
大人を丁稚うらめしさうに見る　新水
大人に豫算の狂ふ席となり　突支坊
大人の憎太皷も冴ゑ渡り　ひさし
大人は都合のつかぬことを詫び　柳秀
大人の木戸は鉢巻締め直し　眠聲
大人に特等席へ舌を打ち　武藏坊
安來節まづ大人を唄に替ゑ　同
大人のしんとしたのへ泣く役者　寂郎
大人へ小兵の男身を反らし　同
大人を子供上手にかいくゞり　智朗
大人の頭を子供見て戻り　同
大人の首は斯う云ふ風に抜け　吐露樓
大人にごの目も一つづつ光り　同
大人の後ろ何やら小競合ひ　町二
大人に高座羽織を脱ぎ捨てる　同
滿員で帝めて下足場しんとする　高峰
大人の樂屋囃けをはぢいて見　同
大人を出だす芝居の人通り　玉政
大人を下女つまらなく通り越し　同
大人と見ゑぬ芝居の靜かすぎ　同
（佳）大人に娘の背へすれたまゝ　鮎美
大人の閉ねて表の寒いこと　惡源太
札止めの前に未練の二三人　東狂子
大人の外は淋しく更けてゐる　光哉
大人の中を木戸まで呼び出され　町二
大人の札を吊るしてピタリ締め　草明
（人）大人を呼で疲れたウキスキー　緑之助
（地）大人は二人の中へ割込まれ　雅流
（天）大人に硝子の月は濕つてる　光路

○　柳路選

大人の看板丈の夜となり　光哉
大人を下女つまらなく通越し　玉政
大人の袋に樂屋風があり　郊村
大人に女優嬉しく冷かされ　同
大人に混合のある木戸の聲　同
大人りの入れ替り寺つ人の列　清郎
大人こ座長はね後を考へる　革郎
大人に帽子を脱げの出れのこ　眠聲
大人の後の方は喧嘩を見　觀月
大人の一人野次ることは野次り　同
大人に娘の背に擦れた儘　鮎美
大人にお茶子お茶子に突當り　吐露樓
大人のゐらい人氣を見て戻り　柳秀
大人を喰つた樣なる小役の藝　我卵堂
組見もあつて大入らしくあり　雨迷
大人のビラを見て居る失業者　吟女
大人の中を物賣り泳いで來　耿三
大人に臨監席へ一人居る　同
大人に豫算の狂う席となり　突支坊
大人に幹事草臥れ甲斐があり　與詩夫
大人に演し物丈を見て歸り　同
大人の袋にたつた二錢だけ　鬼三
大人に前へ立つなと立つて居る　春公子
大人も續かず雨の曲馬團　同
大人は精一杯の筆で書き　幸泉
大人こ見れば人場無料なり　柳哉
大人の次週は古い映畫なり　雅流
大人の袋床屋は飾り立て　晃卓
定員もあつたものかこ入れる事　申哉
大人を祝して舞臺派出に終へ　草明
大人へ子を連れて來てくたびれる　孤舟

大入に野次も少々混つて居　賀名芳
大入を他所に特等餘裕見せ　陽喜亭
大入で日延が二回續くなり　翠峯
大入の人數の中に我も居る　さゝ舟
大入に澤正得意の形を見せ　風柳坊
大入に嫁背の子に泣かれてる　布袋
大入に三味線の手も調子づき　蒼梧樓
大入の袋は緣喜棚に上げ　秀郎
木戸口の順が横町で待つ人氣　呵々子
大入と云ふ木戸口でもめて居る　福太郎
大入の下足に母と殘される　白鷗
本水が受け大入のむし暑さ　同
大入の人押分けて來るお茶子　智朗
中入後大入袋提げて來る　東狂子
大入に警官席は無駄に空き　高峯
大入の中に刑事の目が光り　一笑
大入へ忙そがしそうな下足番　一蝶
大入に諦らめ歸る母娘連　柳狂
大入に先約の席空いた儘　風鈴坊
大入の戻りを氣にして居るも母　南山寒
大入に千秋樂を又延ばし　虚白
大入の舞臺へ遠く伸上り　翠人
大入に警官席の廣い事　町二
大入に外の寒さを忘れてる　光路
大入を詫て仲居は鍋を下げ　同
ぎつしりと詰つた客へ幕が開き　武藏坊
聽衆の多きを辯士油斷せず　無心
大入の中で白銅一つ持ち　鐵洲

大入へ辯士の聲のありつたけ　青水
無料なら大入になる小屋であり　紅陽
大入で朝早くから並んで居　秀甫
滿員の席を大きく取る男　芳靜
藪入が滿員にする國技館　ひさし
大入のしんとしたのへ泣く役者　寂郎
大入で口上書も字に力　如水
大入の芝居で知つた人に合ひ　惡源太
大入に後の髷が氣にかゝり　新水
大入をくゞつてラムネ賣に來る　義情
不景氣な中に大入續けて居　九柳
買物に出たのが大入知つて來る　一鐵
大入がはねて女給の汗をかき　逸江
滿員の札出してから二三人　丹頂
大入に月一杯を打ち續け　菊路
大入の芝居泣く子へ野次が飛び　黄彩
大入を前茶屋手柄の樣に云ひ　太路
大入の御札一日日延なり　庚子
二の替り忠臣藏の又當り　花蝶
大入に役者はこゝと見得を切り　吉朗
大入の芝居も見たと國の母　雪峰
大入に何か彌次つて見度いなり　緣之助
大入の立見見へ無い儘で出る　水聲
大入を初日嬉しく幕の穴　伴内
大入にお茶子辨當にけつまづき　同
大入の御禮高座で申上げ　愛波
(軸)大入に停電をして野次る事　柳路

冬の御用品
あれしらず
御代乃花（みよのはな）
本舗　伊藤大一堂
發賣　高橋盛大堂
到る所の藥店化粧品店に販賣す

虎になつた話

岩本素人

兒童圖書館を持ち、活動寫眞を有し、水族館や動物園を所有する、今の小供は幸福であります。

私は京都の産でありますが、私共の小さい時分はまだ動物園と言ふものは無かつたのであります。變つた動物と言へば畫で見る外、庚申さんのお猿位のものでした。猩々と言ふものは海中に住む動物で潯陽の江のほとりの居酒屋を呑み荒す大酒飲みだと計り思つてゐたものです。そんな頃の事ですから興行師が虎でも伴れて來やうものなら、我々動物ファン仲間ではそれは〳〵大騒ぎです。京極へ虎が來たと言ふので、學校でゞも何所でゞも其噂で持切りです。日玉の松ちやん所の騒ぎぢやありません。學校から歸るや否や包を上り口へ放り込んで置いて、豆板かドングリを買ふべき一個の一錢銅貨を握つて、豫め誘ひ合せて置いた凸坊共と共に、なげられた毬の樣に、京極目蒐けて飛んで行きます。

京極は錦上ルところ、今の落語の席の少し南手にイカサマ見世物專門の小屋がありました。看板の畫には牙をむき出した大きな虎が日月の眼光鋭くそれ丈けで小さな胸の高鳴を誘ふに充分であります

君、はいり。

お前先はいり。

コ、迄來ると一すきまりが悪いやうな心持になるもので、餓鬼陣笠はお互に先陣を讓り合つてゐます。

中では竹か何かであらう、ガチャガチャガタガタガタ〳〵……。

木戸番のおつさんがぬからず。

サーあの通り〳〵只今々々……大虎ぢや大虎ぢや……今生きた兎を喰べてゐる……サー只今々々……代は見ての戻りぢや……小供は一錢小供は一錢……

三つの紺飛白のかたまりは、いつの間にやら小屋の中へ吸込まれて仕舞うのであります。

感激に滿ちて上氣した三つの赤い、丸い小さな顏が息をはづませて、錦の石疊の上を刻んで行きました。のはそれから凡そ一時間程後の事でありました。

いんで虎せうか。

一つの丸が出しぬけに言ひました。あとの二つは響の音に應じるやうに

虎せう虎せう。

我々の會話は實に簡單明瞭です。虎せう！之れ丈けの言葉で一幕劇の筋も科白もちやんと解つてゐるのです。

金ちやんは、竹屋のおつさんの居眠つてゐやしやんす間に、末竹を十本許り失敬して來ました。此點は金ちやん驚くべき天才を有つてゐます。

これで檻が組み立てられます。

僕、虎に成るんねやぜ。

役もめのせぬ内に機先を制したのが私で

ありました。そこで、金ちやんは『虎使ひ』淺ちやんは『木戸番のおつさん』と極りました。

サア御覽なはい〳〵……大虎ぢや御覽なはい。印度はヒマラヤ山で生け捕りました大虎で御座ひ……アノ通りあの通り……サア只今只今……眼光にお目を止めて……。

淺やんは大人の聲が上手です。

ウワーグワーウワー

私も一生懸命です。金ちやんが竹でガチヤ〳〵〳〵。

この牙を御覽なさい。この通り、この通り。

ウーワーグワー。

只今活きた兎を喰べさせます。

座員一同こゝもと大車輪で相勤めて居ります。

ヤー只今只今、あの通り〳〵。

ウーグーガアー。

呼吸がしつくり合つて寸分の隙もない。三人はすべてを超越して全く三昧の境に居ります。私はもうすつかり虎に成り切つてゐます。

ウー。

此時です。不意の亂入者が現はれました

それは店の與吉ぎんです。私の手を無理やり引張つて行くのです。

なんすんね與吉ぎん。

お母さんが呼んではります。

ぢきに歸るよつて放して。

いきまへんお母さんが呼んではります

放して與吉ぎん、放してちうたら

放してんかいな。

お母さんが呼んではります。

實に與吉は融通の利かない丁稚です

こんな奴が大きく成ると、うつかり金持になつたりするのです。

放さんかい與吉、こら與吉、與吉

よなべの子、放せこら。

力ではとても與吉ぎんには叶ひません。無理に母の前へ連れて行かれました。母はこわい顔して

あんた今　何しとおるたんね？

……

なんであんな事してお遊びるのね

……

虎の眞似やみな、ろくな事おしやへんねな。皆が笑はるやおへんか？こんぢからなりまへんね。

私は不平でした。何んで母がこんなに叱るのかと思ひました。母は私が本當に虎にでも成つて仕舞うとでも思つたのかも知れません。（昭和三年の節分）

古句質疑

蛭子省二

質疑小規

(一)質疑は古句に限ること。なるべく古句の出所を書添えて置くこと。(二)質疑はハガキで一人一回三問までのこと。(三)質疑のハガキには所住姓名を明記すること、但し誌上の匿吉は差支なし。(四)一度答へた句、末番の句等については答へない。(五)質疑應答は必ずしも先著順ではない、研究の餘地ある句は次號廻はしとする、質疑輻輳の場合も又同じ。(六)質疑は必ず本社古句質疑係宛のこと。

むなぐらを女房關口流にとり

(十六ページ) 山口縣 狂骨

關口流とは大マカに言つたので、深くとがめだてする要はないと思ふ。古句には此式のものが多い。同篇に

竹の内流で敵をうちに出る

等がある。『觀世と號し北流へ息子行き』の樣にも應用されてある。關口氏心。八郎右衛門と稱す關口流柔術の祖也。初本多氏に仕へ後紀伊侯頼宣に仕ふ。晩に柔心と號す、長子八郎左衛門氏業魯伯と號す。次子萬右衛門氏英、季子彌太郎氏曉後蟻櫻と號す、各其業を嗣ぐ氏業の子八郎左衛門氏連其の家業を以て將軍德川吉宗に仕ふ(武術流祖錄、本朝武藝小傳)

朝歸 女房片倉流で ありこれは流義のあるのではなく

朝歸り一つ眼にはにらまれる

綱をゆるめぬ門番に御閉口

などの狂句の如く伊達家の重臣片倉小十郎を門番に見立てた細工。關口流片倉流などと因緣を以て、句の機微的穿ちこか暗示的興を汲みとらせんとする內容價値は、文句取吟と同樣に批判の態度を一應きめてかかつて置かねばならぬことは當然でありましよう。時には綜合藝術なりとして其の調和の妙を耽美的に高唱する人も先輩の內に見受けるけれど。これは惡くゆくと物識り頓智流の洒落に墮して獨立性の乏しいものである事を恐れさせられる。故事ない傳說なりと不卽不離の間に複雜味を招致するは好い。然し夫れは眞の創作とは別箇の管見に於て理解すべきで、それ程の條件附であるは止むを得まい。同時に綜合藝術の本體が『風流』價値のものに辯證されるは迷惑至極である。所謂新しい飜案句を排斥するなら古い飜案句も亦有難味は薄い、他から借り來たつた布衍的の味ツケでは儼然たる一章としての舌觸りは餘り良くないではないか。

餘事になるが

芳町へ寺澤流の文が來る

芳町の客には僧侶が多かつたから、寺を想像させる爲めに寺澤流を持出した狂句

で、江戸の書家寺澤友齋が創めた御家流の一流である。友齋は友太夫と稱し政長と名く。七十一才元文六年一月二十四日歿、下谷車阪町大久寺に葬る。

（日本教育資料。江戸名家墓所一覽）

燕居雜話に、今書家の何流何樣などなふるは、漢文には作何字といふべし。楊誠齋詩話に

高宗初作黃字、天下翕然學黃字、後作米字、天下翕然學米字、最後作孫過庭字、故孝字太上皆作孫字

と見たり。是正しく黃山谷流、米元章流といふこと也。因に云く今弓馬、鎗劍にまれ、琴棋書畫にまれ、自己の工夫して一門戸を張つ、みづから何流と呼ぶは、不學よりおこりて、一向當らぬ事也。たとへば日置氏の門人から。日置流を學ぶといひ。大坪氏の門人から、大坪流を學ぶといふは。その師家を指していふ詞なれば苦しからぬとなり。

竹の子と栗は和漢の孝不孝

（三四篇）北海道　岳城

竹は二十四孝の孟宗（拙稿唐柳短解御參照）栗は不孝の方で、丹波の國で子が父へ栗を投げつけた處額に當つて命をとつた故に『てて打栗』と云ふとの咄しがある。二十七篇に

竹の子は孝行栗は不孝なり

や四十一篇其他の類句があるけれど、單に傳說と對比した丈けのもので詩としては價値は更にない。父打栗に就ては名稱の起りに色々の說がある。嗚呼矣草を拔記して置きます。

丹州より出る爺打栗と云ふものは俗間に種々の妄說をとなふしかも生栗の見事なるを爺打栗といふ。按ずるに榻栗は栗を干て杵に榻て殼とシブ皮と去りて菓子とす。然も堅剛にして齒の鈍き人の食しがたきゆへこれを擣ひらめ柔にしたるが擣栗なり。今ら飛驒の國より出るうち栗貴品なり。打栗勝栗にて聲の響よろしき故兵家に用ひられ、尤も出陣に是非賀祝のものとせらる、丹州の產もいにしへ上手ありて制せし人の通稱とせしものならんか、堺の出齒庖丁、源五郎鮒の類ひにて老父の打たる名產故爺擣栗なるべきに、尋常丹州より出る大きなるものを。てて打栗といふ。甚敗は栗實一顆掌の內に滿て手々內栗なりと云よた時熟して芒刺の殼を破裂してみづから出て落る故出て落栗なりと云妄說にして信用せられず云々、丹波栗は形大にて代表的なものだが上等品ではなく。テテウチ栗は形稍小なるも甘味あつて上種卽ちカチ栗の材料である

○

引こみはぬう事に勝ち縒るにまけ（九ヘン）

藪入の四貫からけを水の淡（武玉川八ヘン）

右二句の質疑を受けましたが確信ある意見を陳べ得ません、（多分そうではなからうかと思ふ迄のヒントは得てゐます）永く握つてゐても申譯なし。弘く敎ゐを乞ふ次第です。後句に對しては參考句もあり、大等も亦雜句もの。

四貫からけに活る程ヶ谷（武玉川十ヘン）

靈塲をしくわんからけの寬永寺（文化）

天臺にしくわんからけの錢の寺（天保）

各地柳壇

川柳雜誌社 三月例會

本社例會を四日夜日本橋倶樂部で催しました。當夜路郎先生は有意義な講演をされ非常な感激を與られました。新らしく參會された方もあつて、なか〳〵盛會でした。（二柳子報）

路郎、馬行、ひろし、革郎、久美子、赤丹、萬よし、柳骨、素人、武子、琴人、加香、かほる、柳坊、銀波、秋風、秋水、南天、曼平、幸泉、文蝶、觀月、鮎美、葉平、鳴玉、冷笑、靖弘、松山子、岳山坊、吉則、虚白、享三、廻天堂、陽喜亭、孤舟、久郎、聞路、樓史、炭車、黒院、亂耽、二南、山花紅、清太郎、喜一郎、秀郎、信次、其家、鬼三、政吉、兩足子、白蝶、屏二呂、露斗、文久、新水、翠峯、舟々、赤城、秀甫、双葉子、耿三、蒼梧樓、武藏坊、柳河樓、翠川、雀涙、十九、山雨樓、嶺月、紋太、

二柳子 席題 町内路郎選

町内の灯るは將棋うまい家　馬行
町内と妾は別な氣でくらし　翠川
人樣の御世話にならぬ町に住み　山雨樓
町内の娘ポチ〳〵減つて行き　玉政
町内へ一軒家持つ立志傳　文久
寺ばかりあつて町内儲からず　松山子
町内の事は女房に敎へられ　夢路
町内の頼みまつさが氣に入らず　二南
町内に未來の俺がわかるかい　亂耽
町内の事へ質屋は遲れて來　廻天堂
町内の月掛ひまな日に取られ　琴人
見榮ばかり張る町内の底が知れ　双葉子
貧しくも此の町内は去り難し　雀涙
町内に豆腐屋見下げられて住み　かほる
町内の子に遊ばせぬ地所を持ち　紋太
町内にゐて何もせぬ詫を云ひ　同

席題 消毒 馬行選

つきあいにする消毒邪魔くさし　舟々
消毒が濟んでしまつて寄りつかず　其象
消毒をする手にタチル渡される　山花紅
素つ裸日光消毒と言ふ奴さ　素人
嬢過して床屋消毒さぼるなり　亂耽
好い天氣葬式の出たあとで乾し　櫻史
おどかして外科醫消毒させるなり　幸泉
消毒に衞生員は無口なり　柳骨
生命は取り止めました手を洗ひ　萬よし
消毒がなか〳〵長い手術臺　三笑
病身にして消毒になれてゐる　聞路
消毒をしてると見へぬ散髮屋　炭車
消毒といふ太陽のもの足らず　山雨樓
消毒に來た人夫にも聞いてみる　同
消毒に今日三度目のバクテリヤ　露斗
消毒にヒリット痛いのが感じ　同
消毒へ黴菌一寸あわてたり　同

五客

出戻つて來て消毒の絹蒲團　鮎美
消毒のあとは優しい手に卷かれ　舟々
君を思へば消毒をした葉書が來　路郎
消毒に看護疲れのまだ殘り　紋太
消毒の軒に巡査の夜が明ける　玉政
（人）消毒をして病室はどれかいな　二柳子
（地）消毒の要るのも屑屋ひつゝかみ　紋太
（天）消毒へ手傳ふ樣に日があたり　かほる

席題 行末 紋太選

行末に言及をして金を貸し　馬行
行末は考へません仲居なり　赤城

行末を大方知つて氣が折れる　琴人
ぢつと吾が行末を見る父の像　耿三
行末が大事だ地味に醉ふて去に　葉平
行末の事ばかり云ふ父と母　双葉子
行末に背廣の服の色は褪せ　一路
この資産此子の行末案じられ　屏三呂
行末を思ふ金庫に艶がなし　亂耽
行末をたのむ息子の細すぎる　其象
行末を案じる煙草ばかり吸ひ　鳴玉
行末は此の子に任す頭なで　玉政
行末をお前が見んと誰が見る　同
行末を思や亭主が馬鹿に見ゐ　路郎
行末をあきらめきらぬ妻と住み　ひろし
親馬鹿と云はせ行末案じてる　同
(人)行末はまさか藝者と思ふてず　亂耽
(地)行末に只金金の父があり　翠峰
(天)行末は兎に角火鉢買ふて來る　赤城

席題　燒芋　互選

燒芋へしばらく續く無駄話　愚陀
背の子は燒芋握つたまゝでねる　風柳坊
燒芋を買ふ色町の派手な柄　文蝶
サラリーを捨てゝ燒芋賣つて居る　狂三
燒芋のどれも一本の箸のあと　耿三
猿と カニ 話して燒芋よく賣れる　觀月
燒芋屋蓋を明けると燒けてゐる　翠峰
燒芋を乳母の背中へぬりつける　秀郎
雨の二階燒芋なと買をかいな　亂耽
ちと溫い日で燒芋屋汗をかき　嶺月
片面燒けてから燒芋のひまがいり　素人
片手だけ手袋はめて燒芋や　南天
つきさしてまた蓋をする燒芋屋　狂三
はにかんで買ふ客に芋負けて吳れ　虛白
燒芋や車夫としばらく話し込み　屏三呂
燒芋屋手鼻ゥつかりかむところ　翠峰
燒芋屋直きに燒けると裏返し　炭車
牛經が燒芋一つくれるなり　かほる
湯氣の中から芋と顏とだし　葉平
お茶受けに燒芋が出る氣の安さ　曼平
ホッコリが來てお茶受にして仕ま　武藏坊
雪の午後湯氣がうづまく燒芋屋　蒼梧樓
燒芋に卒業近い髮になり　萬よし
燒芋屋まともに朝の陽を浴びる　秋風
落魄れて燒芋うまいものにする　同
燒芋が出るとは見ゐぬ小袖なり　琴人
霜やけの手に燒芋が冷けてゐる　同
燒芋へ笑ひながらに御寮人　陽喜亭
へた二つ殘し燒芋みんな賣れ　同
燒芋屋銅貨で釣を吳れるなり　孤舟
燒芋屋子供が來るとヘタを交ぜ　同
教科書の反故へ燒芋包まれる　廻天堂
自轉車を下りず燒芋一錢買ひ　同
針仕事燒芋の錢ほつてやり　露斗
燒芋屋いつもの顏へまけてやり　同
燒芋を食べると輕い汗が出る　舟々
お待遠樣と燒芋ちぎがはれ　同
店火鉢飾へば芋の皮が出る　櫻史
竹馬の一人燒芋塀で喰ひ　同
髭のてまへ燒芋なんか食へますか　鮎美
笑はせてから燒芋一つ取り　同
燒芋に母と娘のへだてなし　紋太
燒芋屋兩手で渡し錢を取り　同
燒芋のほんとの味は藏の中　馬行
燒芋屋國の訛りがまだ消ゐず　路郎
道ばかり今日はきかれる燒芋屋　同
待つほどに幕も使ふ燒芋屋　二南
燒芋屋一邊湯氣を見せるなり　同
裏返す芋にお客の數が殖ゐ　同

席題　置き去り　互選

置去りにされたと知つて錢を讀み　久耶
置き去りが稽古の三味を聞てゐる　鬼三
置き去りにされて幸ひ二三日　信郎
置き去りにあふたが家へ早く去に　山花紅
波止場迄置き去りの子が泣にくる　葉平
置き去りにされても憎めない女　秋風
置き去りを上かんやだけが迷惑し　南天
付け替る貨車置去りにされたやう　曼平
置去にタソなと食へと飲んで居り　吉郎
置去りにされても初手は待て居る　加香
置去りのわけを女中は知つてゐる　一路
置き去りと氣の付く時分眼が霞み　かほる
置去られ會ふたら不服云ふつもり　三笑
置き去りをされてはゝんと考へる　赤丹
置き去りになつた空家の古い下駄　耿三
置去りと知らず饅頭を喰べて居り　孤舟
置き去りは怒つて下駄を履き違ゐ　翠川
置き去りと知らず白粉氣にして居　其象
一週間會はず置き去りにして　紋太
置き去りへ家賃取りにも行兼ねる　喜郎
澤山な荷物を持つて置き去られ　久美子
置き去りは金が來てから元氣づき　秀郎
置去りにされて貯金が殖ゐて行き　鳴玉
置き去りの猫のこ〳〵と歩き出し　露斗
置き去りは胸につかゐる飯を食ひ　陽喜亭

置き去りは柱時計のねぢをかけ　同
置き去りの腹へ時計がゆるく鳴り　馬行
玩具みな置去りにして泣いてゆき　同
置き去りを器用にされて感心し　二南
置き去りが二十になつて分つて來　山雨樓
置い加減だしに使はれ置き去られ　同
置き去りの子供銀貨を見せ歩き　翠峰
置去りはまむしを食べて歸るなり　秋水
置去りと聞いて置去りあわて出し　清郎
勘定になつて置き去り落ちつかず　路郎
置去りをされた子供の負けをしみ　愚陀
置去りを食はしたつもり道であひ　同
置き去りされて氣味よい雨となり　聞路
置き去りが開ける水屋になにもなし　聞路
置き去りに梅も櫻も咲いて居る　貳子
問はれても置き去りなどゝ云はぬな　同
潮時を見て若旦那置き去られ　素人
置き去りの歸つた後へ電話なり　同
置き去りへ不意に借金取りが來る　二南
置き去りへ日本晴の朝となり　同
野心ありわざと置き去り喰つて居る　虚白
みんなして粹をきかして置いて行き　同
置き去りを承知のやうによく寢てる　琴人
あとの一本終列車出てしまひ　同
置き去りの腹の立つことばかりなり　嶺月
置き去りを先輩だけに腹を立て　同
置き去りの枕許もう水がなし　萬よし
置き去りにされると見えぬ段梯子　同
置き去りの眞面目くさつて面白し　文久
置き去りの一人名案あつた筈　同
置き去りの財布は知れず終ひたり　屏三呂

俺一人飲と置き去り目がすわり　同
置き去りの欝憤南地まで飛ばし　馬行
置き去りと氣付く頃には腹がへり　同
置き去りの思案は腹が立つばかり　山雨樓
置き去りにした心配を笑ふなり　同
倉番は置き去りされた氣味で生き　路郎
置き去りにされたが植木ほめてゐる　同

川柳雜誌社

道頓堀支部吟行

白鶴釀造場見學　庄萬よし報

奈良の水取も終りに近き二月十一日、路郎主幹始め柳友二十一名正午過ぎ御影白鶴本家に集合、灘本場の芳醇無比の美祿を出來立ての粕汁の饗を受け西邑支配人の案内にて、新設の瓶詰工場及び釀造中の新藏を見學す、近頃のんびりした氣分で、廣々した酒藏階上大圓卓を圍んで作句した。

記念日　互選

記念日が來ると淋しい老夫婦　毒仙
記念日だあの盃を出して來い　琴人
東京へ着けば計らず記念の日　悟郎
記念日の今日勤續の價値を知り　双葉子
記念日に思ひ出さるゝ卑怯者　刀三
萬歳を三唱記念日幕を閉ぢ　眠聲
陸軍記念日れむたい講話　亂耽
何でや知らんけど記念日旗を出し　同
記念日に八百屋伍長と知れるなり　萬よし
傷痕を撫でゝ記念日夜が更ける　同
記念日にオイ禿げたぞと肩を打ち　同
習れ勝てる日なり傷痕から話し　源坊
何の日か兵隊さんが折をさげ　同

記念日に主人自ら旗を出し　東洋鬼
九月一日だなと鐘を聞く　同
記念日の朝起きんかい〳〵　二南
記念日をトロンと醉ふて面白し　同
記念日を淋しがらせる子が一人　同
居酒屋で今日記念日の酒に醉い　清公子
記念日だ俺が自殺をせうとした　同
記念日にあれが閣下の赤亡人　同
記念日をうつかり忘れそうになり　孤舟
記念日へ老けて來たのが見違はれ　同
記念日へ四五人減つて寄つて來る　同
記念日へ嬉しい顔の松葉杖　同

酒藏　椙元紋太選

難五郷藏の間を唄が行く　清公子
説明をするに慣れたり藏男　悟郎
晝電一つに酒藏寒いこと　眠聲
飲めそうな顔が酒藏見て廻り　松山子
世帶でも出來そうな桶藏にある　琴人
百日の聲酒樽へ刎ね返へり　孤舟
酒藏の桶を廻れば又一人　同
酒藏に絞る靜かな音を聞き　太閤
酒藏は男ばかりの聲を聞き　同
酒藏に病氣と蓬ふ溫度表　同
酒藏にくそ面白く働いて　二南
酒藏を出ると濱風さつと來る　同
酒藏のあんな隅にも杜氏一人　萬よし
酒藏の何が何んだかでかい事　同
酒藏を出るとうつとうしさの晝　十字路
桶の數樽の數酒藏廣し　同
酒藏は説明たんと要るところ　彩秋
この在は只酒藏の目立つのみ　同

酒藏で見ると四斗樽ちつちやいな　清公子
(佳 酒藏のひれもす桶と影ばかり　亂耽
酒藏ゝ桶はみんなに欲しがられ　源坊
酒藏にはつきり湯氣を見る寒さ　太閤
しんかんともう酒藏の春になり　萬よし
杜氏の眼にこりや上乘の泡が湧き　同
(軸)酒藏に血氣熾んな問を出し　紋太
酒藏に醉ふての話續くなり　同
酒藏にあるは三十五石入　同

酒　麻生路郎選

灘の海新酒を積めばかすむなり　萬よし
五十年何を恐れて禁酒する　源坊
呑まなけりや呑まぬで女房心配し　海仙
灘に在ることが嬉しい猪口の數　紋太
ころあいな石を見付けた二合瓶　悟耶
春風が二合の酒に吹いて來る　清公子
飲めそうなお顔ですよと飲ませられ　孤舟
五分五分と知るマルクスと酒の味　刀三
飲んでから連れてやるぞが變ている　陽氣亭
冗談を産み出すやうな酒が出る　同
中立で出て只の酒ばかり呑み　東洋鬼
まだ醉いが顔にあるまゝ家へ着き　同
青春は二度來ず酒に溺れて居　亂耽
酒、煙草、女、女給へ戀もする　同
一生を濃く彩りし酒よ酒　同
辨當を置くや置かずに父は酒　燕柳
たゞ酒の力を借りる姉藝者　同
萬よしへ來たがラストの梯子酒　同
(軸)呑んでごろもう寢るだけの圓滿さ　路郎
火事か火事かと言ふはかり矢張り飲み　同
呑むことを覺へてからの支配人　同
いける口氣輕くなつて橋を越に　同
うとましき世なる哉酒を持て酒を持て　同

見學雜觀　互選

今の見學男前だと女工言ひ　双葉子
白鶴へ來て一合でもう呑めぬ　源坊
酒藏を下戸ふらくと外へ出る　松山子
酒の粕あんな事して出來ており　眠聲
粕汁を醉ふた手付きでついでやり　二南
見學に風呂の男があはてゝ居　同
大酒家をはめてやりたい桶があり　同
腕時計など百日は買ふて去に　東洋鬼
白鶴を父にすゝめる氣で歸り　同
百日は一升瓶でお茶を呑み　同
明日かへる杜氏裏町へぶらり來る　同
支配人これでも見學かと思ひ　悟耶
見學が去んで酒藏唄になり　同
酒藏へ來ればお酒の有難さ　燕柳
飲めぬのもつい手を出したたれの猪口　同
もつていネエ酒を手桶で運んでゐ　清公子
酒樽が腹を干して陽は麗ら　同
説明を聞くと酒藏足が冷へ　孤舟
これだけの設備日本はよく呑むな　同
これからの酒は粗末に出來ぬなり　亂耽
酒樽のその大いなる呑まんかな　刀三

川柳雜誌社　糸屋町句會（大阪）

三月八日晩　於聚樂館　川合舟々報

兼題「春風」　かほる氏選

春風よ女の襟に吹いてやれ　素人
春風に今日アイロンを掛けて出る　舟々
春風にいつそ氣樂な本を讀み　鮎美
春風に舟い子供はよく遊び　雀涙
春風が池のごもくを隅へ寄せ　燕柳
春風に新婚と云ふ合トンビ　翠峰
春風がガールパックへひつかゝり　孤舟
春の風田舍の道は肥くさし　眠聲
春風に風呂場の窓もあけられる　二竹
課長までラケットを持つ春の風　萬よし
春風にしんしの甲へひゞが切れ　三笑
春風に當り母親ほどきもの　鳴玉
春風や空地の香具師に人だかり　翠川
春風にハート形した花吹雪　耿三
春の風こゝらは溫い日向ぼこ　萩麿
雲の身になりたい樣な日が續き　京耶
春風に書齋の位置をかへて見る　悟耶
パラソルとたもとが見ゐて春の風　武藏坊
春風に瓢簞の中洗ふなり　赤城
春風や今年も同じ暮し向き　同
豫定より旅がおくれる春の風　聞路
物干の風に女房は春心持ち　同
春風がねむたい唄を持つて來る　蒼梧樓
椽側が少しざらつく春の風　同
(軸)春風に番頭の鼻光つてる　かほる

席題「綻び」　互選

綻びを別に氣にせぬやんちやぶり　正博
綻びる音に相手は手を離し　孤舟
綻びをたのむ時だけ頭さげ　里十九
綻びはどつち向いても人があり　舟々
綻びぐらひ妹は縫ひますよ　鳴玉
袖落ちそうに腕白戻つて來　虛白
綻びを直して髷へ針を差し　かほる
綻びのおいどを一つ叩れる　白蝶

色街を出て綻びた事を知り　双葉子
許嫁まだ綻びを縫ふてゐる　鮎美
小言の前に綻び立つたまゝ　陽喜亭
子澤山　次から次へ綻ばし　悪源太
母アちやんと戻るたんびに綻はせ　琴人
綻びへ背の子供は足を入れ　雀涙
綻びを先きに見つける女の子　萩麿
それからは娘綻び縫ふて置き　観月
綻びへ父母の意見が合はぬなり　蒼梧樓
無茶苦茶に綻びたのを縫つちまい　耿三
綻びた脊中へ羽織をかけて行き　同
一人身のその綻びは知つてゐる　赤城
綻びてゐてもかまはぬ二階借り　同
綻びのまんま入日に子は歌ひ　二竹
糊飛びのあとで綻び笑はれる　同
綻びをからかはれてる十五六　素人
髪結ひのすき子おいどを綻ばし　同
なぐられた事を綻び知つてゐる　翠川
今出るへ綻びの目がとまり　同
綻びを脱がす疊へ砂が落ち　聞路
綻びをまた叱られて黄昏れる　同

席題「棟」　互選

棟味噌の手に褄からげつつて來る　舟々
夜釣りから歸つて棟で手を洗ひ　かほる
棟の手でそこへ置かれる推薦狀　毒仙
棟箱と並ぶ小鳥の餌が賣れる　雀涙
粽棟の妻と云はれて古びてゐ　琴人
女中今日うつかり棟を買ひ忘れ　赤城
棟じやとて只では呉れぬ米屋なり　鳴玉
棟袋娘鼻からこするなり　翠川
此の次に棟を米屋たのまれる　悪源太
棟袋妻も忘れる年になり　虚白
釣れぬのが矢鱈に棟を撒き散らし　耿三
あぶら手に棟をつかんで走り元　萩麿
棟の手のまんま米屋の畳はすみ　陽氣亭
棟袋持たせておいて一と摑み　同
薄暗いとこから棟は持ち出され　孤舟
手の型を入れて棟屋はまけてくれ　鮎美
棟を買ふ事にも馴れて世帶じみ　同
棟袋今日はじめての日本髷　白蝶
棟袋見やう見眞似の女の子　同
黄昏の池へ棟桶叩く音　蒼梧樓
棟袋それから先きを考へる　同
棟の手へ泣いた子供がすがりつき　二竹
米俵かつぐ力へ棟がつき　同

席題「差し向ひ」　互選

差し向ひ買つて來たのが氣に入らず　舟々
差し向ひ更けてゐるのも知らぬなり　鮎美
一人者壁と年中差し向ひ　琴人
もぢ〳〵として初戀の差し向ひ　蒼梧樓
差し向ひ飛車角宙に迷ふなり　観月
差し向ひ妻もよつぽど老けて來た　白蝶
差し向ひ火鉢のお餅よく燒けて　二竹
差し向ひ一人ほしいだけの愚痴　陽喜亭
朝飯は時々休む差し向ひ　素人
差し向ひ知らぬ一時が鳴つてゐる　雀涙
皆去んだまた火鉢と差し向ひ　里十九
差し向ひ話しがすめば手を叩き　翠川
差し向ひになれば何にも物云へず　悪源太
差し向ひ欠伸をするは寢たい也　三笑
差し向ひ鐵瓶たぎり夜が更け　加香
差し向ひ女の方はひぢをつき　耿三
差し向ひ今日は親父の邊ふた顔　鳴玉
差し向ひお前と俺と二人きり　萩麿
差〳〵向ひ人の羨やむ柄でなし　虚白
灯がついて障子に映る差し向ひ　双葉子
黒子から目をそらしてる差し向ひ　聞路
差し向ひ女は足袋をぬぎかゝり　かほる
差し向ひうつかり障子開けられる　孤舟
差し向ひ別に文句はないのなり　毒仙
差し向ひ蜜柑の皮がたまるなり　赤城

席題「懐爐」　互選

辻待ちの車夫は懐爐の用意出來　雀涙
懐爐はこんな具合に消ねてゐる　聞路
すき腹へ懐爐がきつうこたへて來　双葉子
消えてゐるとも知らず懐爐の暖　鳴玉
懐爐もういらなければ母へつり　耿三
その腹へ懐爐の置場なかりそう　観月
胃腸病懐爐の事を云はれてゐ　虚白
懐爐など入れて短氣な父はふけ　赤城
家出した時の懐爐を入れてゐる　同
寒かつただろうと懐爐かして呉れ　萩麿
姉様者懐爐を見せて笑はれる　翠川
美しい端切れで娘懐爐卷き　同
完全に消へて懐爐は捨てられる　孤舟
拾ひ物懐爐うつかり落ちかゝり　同
峡勤の理由懐爐を出して見せ　蒼梧樓
胃痙攣遂に懐爐で治まらず　同
懐爐もう使ひ古びて消ねたがり　毒仙
嫁の持つ懐爐へ姑不思議そう　同
伊勢海老のやうに懐爐は抱かれる　二竹
懐手そつと懐爐が握られる　同
懐爐灰ざだい小便近いなり　舟々

懐爐灰捨てると自分の方へ散り　同　琴人
湯たんぽがよい懐爐がよいと子の病ひ　同　白蝶
懐爐灰鼻より遠くあけてゐる　同　陽喜亭
久し振り逢へば懐爐を出して見せ　同　鮎美
懐爐入れて春の彼岸を待かねる　同　かほる
灰だけになつて懐爐は抜き出され
一人子へ母は懐爐を入れてやり　同　同
御免やすと懐爐の火をつける　同　同
懐爐を入れて中將湯をのみ　同　同
初大師懐爐の灰が立ち消へて　同　同
宵中へも懐爐を入れてせき一つ　同　同
恐わそうに懐爐のふたを開けてゐる　同　同

川柳雑誌社　**加古川支部**（兵庫縣）

二月五日黄彩居ニテ　加納梅更報

家
櫛卷が似合ふて婀娜な後家となり　一品　千苦樂
未亡人こじんまりした家へ越し　一品　一品
後家の子はこざつぱりさせてあり　梅更　梅更
いやですよ佛の兄も居りまする　一品　一品
年金は淋しきものよ二十後家　黄彩　黄彩
卒業を樂しみにして後家でゐる
節分
節分のお化けに母は若くなり　泰山　泰山
實船貧乏な子が賣りにくる　黄彩　黄彩
節分は鬼も路頭に迷ふなり　梅更　千苦樂
梅見
雪模樣梅見の連れが一人減り　千苦樂
寒さうな顔で梅見は戻つて來　黄彩　十公
梅が散り尼が淋しく掃いてゐる　十公　千苦樂
梅見ならよそうと女房寒くなり　同　同
梅の香を辿る細道曲折し　洛陽

川柳雑誌姫島支部

鮎美居偶會（大阪）

二月廿日夜　水谷鮎美報

今宵はからずも熱心な人々が集り作句しました作句中一杯のうどんに「しばらくはうどんをすゝる音ばかり」馬行氏の名句を實感しながら夜の更けるのも知りませんでした。

題「黒　襟」

黒襟へその長火鉢よく似合ひ　幸代糸　幸代糸
黒襟はもう染直しですと云ひ　賀名芽　賀名芽
黒襟をつけて女房の貞女ぶり　鳴玉　鳴玉
頭痛膏張つて黒襟かんを立て　鮎美　鮎美
黒襟がひとりきてゐる晝の風呂　同　同
黒襟のふとつまされた子を貰ひ　同　同
闇はれてからも矢張り黒い襟　冷笑　冷笑
はつきりと眼に黒襟りが殘つて居　同　同

題「菓　子」

お茶菓子をうんとつかんだ氣の惡さ　幸代糸　幸代糸
お粗末と出された菓子に手が出ずず　賀名芽　賀名芽
お菓子では機嫌のとれぬ歳になり　観月　観月
姿の千またチョコレート見せにくゝ　鮎美　鮎美
お酒はと云へばお菓子が好いと云ひ　冷笑　冷笑
お菓子をばもたせて妾かへすなり　同　同

題「雨」

泣いてゐる舞妓の首へ雨がおち　賀名芽　賀名芽
降るまでの風にのれんが舞あがり　同　同
俄雨通天閣の下でまち　観月　観月
雨降りを機子に着せた晴夜なり　鳴玉　鳴玉
美くしく湖畔の宿で雨が降り　鮎美　鮎美
失業の眼にあてのない雨が降り　同　同
しんみりと話す障子へ雨となり　冷笑　冷笑

題「公　園」

除隊兵公園で機械體操　鮎美　鮎美
公園を女將素氣のう通りぬけ　同　同
公園のブランコへ櫻散りかゝり　同　同
公園の春を一人で見にもくる　冷笑　冷笑

川柳雑誌社　**螢ケ池支部句會**（大阪）

安西杏三報

春とは云へ未だ蕾もかたい彌生四日句會を二柳子、馬行兩先生を迎へて開きました。

花見客の無理を車掌は逆はず　馬行選　馬行選
花見客思ひ思ひの座へ坐り　荳舟　荳舟
見合しただけで歸つた花の山　邦文　邦文
花の山向ひの後家の顔も見ぬ　紫海　紫海
小屋掛が立つて花見の客が來る　芳静　芳静
花見歸りさて人數が合はぬなり　玉政　玉政
花見から歸ると留守居名刺出し　兩足子　兩足子
夜櫻の影で小さくものを賣り　光哉　光哉
（軸）花見から消息のない二三日　壽麿　壽麿

見　舞（兼題）　二柳子選

病人も坐れるようになりました　ごびん　ごびん
見舞客鼻をかみ又鼻をかみ　紫海　紫海
見舞より外の話に灯がともり　玉政　玉政
同病の心安さは見舞ひ合ひ　兩足子　兩足子
どれ程にしても嬉しい見舞品　荳舟　荳舟
見舞狀豫期したものが入れてなし　寂耶　寂耶
御見舞も致しませんと恐れ入り　呂山　呂山
病みついた當時見舞の多い事　壽麿　壽麿
忌中札見舞の慌てまい事か　杏三　杏三

病院の見舞櫻を見て戻り　同
見舞狀丈では濟まぬ旅支度　光哉
見舞つてる客も風邪引らしい聲　同
缺勤の續くへ寄れば病んでゐる　同
　　住吟

見舞客にすれば粗末な菓子にして　葭舟
長病に見舞の人が絶へて來る　兩足子
病院の廊下で見舞チト迷ひ　呂山
買物を頼まれて居る見舞客　玉政
病人は義理の見舞をうるさがり　杏三
忠告もいゝが見舞を持つて來い　同

節穴席題　互選

來客を節穴から覗く子供連れ　白詢
節穴へつゝこむ樣に覗き込み　どびん
物思ひふと節穴が目に止り　呂山
節穴を覗いた庭の廣い事　はじめ
節穴へ近所の顔がよつて居り　芳靜
節穴を覗いて通る出前持ち　玉政
節穴を覗け　梅が咲いてゐる　杏三
覗かうとする節穴に人の聲　馬行
節穴へ二人の智慧の丈が伸び　葭舟
そんな氣でない節穴へ叱られる　同

川柳雜誌社
小松支部
芦城川柳社例會（小松）
二月十日於花月席　本田柳一路報

裏口　寺西芥路選

裏口が裏町へ出る長い暮し　盜鐘
流連の裏口から聞く鷄の聲　太魚
裏口の窓が破れたまゝの冬　日出夫
裏口へ廻つて留守はあきらめる　川柳子
裏口へ廻り夜遊び吠ゐられる　松水

賣切れ　馬場加賀頭選

賣切れの札恨めしく見る女　芥路
賣切れたのへ帳面のいそがしい　川柳子
附木だけ殘り看屋干せてゐる　久流美
(秀)賣切れが何邊もある香具師の口　盜鐘

二階　上野金鐵子選

氣に掛る二階座敷になじみの妓　柳一路
言譯がだん〳〵小聲になる二階　太魚
絶景を賞めさす二階連れられる　盜鐘
(秀)二階から見てゐる世間忙がし　松水
二階がり炭一俵の置き所　水聲
(軸)二階の客呑むは五勺に足らぬ酒　金鐵子

猫　本田柳一路選

お姿の無心へ猫は撫でられる　松水
宿替へを猫は素知らぬ顔で居り　小波
猫の髭二階の騒ぎ不審そう　久流美
(軸)炬燵からびつくりさせて猫が出る　柳一路

雜　吟　安川久流美選

一せいの聲に合せて襁を見せ　金鐵子
五六人並ぶと女よい度胸　加賀頭
五人拔おしいところで砂を喰ひ　日出夫
嘘と言ふものにもまれて五十年　松水
一周忌笑顔の寫眞に母は泣き　水聲
(秀)非常線一人〳〵なうたがはれ　川柳子

川柳雜誌社
金澤支部
金澤川柳木曜會（金澤）
三月五日　宮本銀砂子報

兼題　雜　安川久流美選

唯一匹になつて壽命を保たされ　三波子
箸の音今日も達者な夜となり　すみ三
用意した嘘あつけなく信ぜられ　銀砂子

創造の喜悅へ今日も編みつゞけ　同
折目正しく拾圓札を借り　眼隱子
干からびた頭へ終樂鈴がなり　同
土の香に親しみつゝも生を知る　紅の花
掌へ見すかされたる顏を伏せ　同

席題　村　比賀すみ　三選

打ちおろす鍬へ農村黃昏れる　好次
木魚にだん〳〵村が近くなり　眼隱子
米作る村とは別に文化村　銀砂子
村中の顏たてゝ助役歸つて來　紅子郎
(軸)美しい理想に生きて村を出る　すみ三

江戸　中川眼隱子選

江戸辯で無理な言ふてる間の宿　銀砂子
江戸へ來て上野の鐘を寒ふきゝ　すみ三
上野から江戸の夕べになつて行き　紅の花

炭　淺村紅の花選

炭ついで去つた仲居の手の白さ　三波子
炭ついで母は愛想よくしやべり　紅子郎
炭屋またうつかり黑い手を使い　好次
まゞ炭へきれいな世辭がもつれてる　すみ三
炭切つて今日日曜のお父うさん　同

月二會例會（尼崎）
一月二十一日於木三居　同人報

大工　松郎選

客に來た大工柱をなでて居る　木三
夕燒けに大工小屋から鑿の音　竹二
普請場の大工へ守子のくちい口　吟女
新建の大工に家賃聞いてみる　同
お隣へ大工が來てるなと思ひ　二水
研いで居る間は大工靜かなり　同
棟上に棟梁の瞳が熱うなり　盧白

ピルヂングが高く見上げて大工立ち　同
本宅のちりをつまんで大工去に　松郎
泣かされてすぐに歸らぬ大工の子　同

雜

三越で柄が定まらず飯にする　木三
泣いてるねつめする樣に乳をやり　同
聞いて見りや長女で女ばかり也　二水
客火鉢温もるまではかしこまり　同
乳搗る安心子供寢かされる　二竹
居眠りに火鉢一つが大事なり　同
子等をみな火鉢に寄せて年をくり　よし源
議會解散いつそ借金しよくなり　同
マーケット未だなれきらぬ妻であり　吟女
入學へ話の長い母同志　同
三越を出るとおもちやのかさばって　同
あきらめて火鉢へ來ればみつめられ　松郎
買物をした奥樣の手がよごれ　同
北風をうらむが如く乳を抱き　同
醉さめにみかんの皮を山とつみ　同
嬉しい氣分
遠足へ目さまし無駄な音を立て　黄彩
雷態と思ひし親の輕い由　樂水
緋縮緬の襷も踊る新世帶　絹水
嬉しさをたんすの中へしまい込み　黄彩

至誠川柳會（天下茶屋）

二月例會を十三日午後六時から南海至誠團事務所で開く、川柳雜誌社主幹麻生路郎先生の柳話を聞く（幹事）

金（兼題）　路郎選

いくらだと大きく出たが金は無く　靜石
狂言の家出お金は持つて來ず　朝陽
金使ひたしなめてから母は呉れ　宇土木
どつちみち足らぬ金だとやけになり　安藤
硫酸をかけられる程金を持ち　樂居
愛の巢の幻滅金が降つて來す　同
品行は方正金は無いの也　同
夕刊賣のぬくいお釣錢を汚ながり　多聞
溜めて來た眼にチツポケな國の驛　同
かはうそのトンビが似合ふ程たまり　同
金策の腕組首は折れたやう　土井
安からぬ頭を金に下げさゝれ　同
借金も慢性となる日本人　同
煙草入納めてやつと金の事　同
高い金借りる判では無かつたが　阿形
人の子に讓る金とは知らざりし　同
新佛れかせておいて借りにゆき　泰平
宵越しの金を殘して今の店　大塚
絹ざしの金入丈けの戀なりき　呑陽
一錢の金まではじく金滿家　飯原

約束の金はと女きつい顏　萬屋
工面して逢ふも左程に思はれず　一路
又借りて此の月末の掛がすみ　骸骨

嫁（兼題）　路郎選

僕の嫁は僕が探すと申します　樂屋
花嫁は宵寢の母の咳をきゝ　朝陽
嫁に來て先づ今年は無事に濟み　阿形
丸髷に一櫛入れて嫁を賞め　呑陽
嫁呼んで返事がないとかつとなり　津田
御歸りと嫁針指を一寸押し　宇土木
姑にいつもまけてる嫁の親　安藤

空腹（席題）　互選

空腹を苦にせぬ意氣の夜學生　大塚
空腹へ電車の響く病上り　朝陽
空腹に摩耶山の灯はぽつとつく　多聞
空腹は脚絆のまゝで膳につき　泰平
空腹に戟きましてと顏をなで　同
空腹にしつけのよさが伺はれ　呑陽
空腹もかゝへて戻る新世帶　同
空腹をかゝへて會社遲刻せず　瓢雷樓
ペコ〳〵の大勢に兎二疋なり　樂居

時計（席題）　互選

腕時計買つてやるとはいつの事　安藤
半を打つ時計長屋の誇りなり　骸骨
初年兵行く先き〳〵で時計を見　同
安時計行くさきで見たらかけ　繁舟
流行でない型が父のかたみなり　泰平
懷中で出さずにのぞく二十型　同
何時だと思ふのだねと時計を見　同
セコンドの刻みに病重く見ね　松島
目醒しと鮒と置いてく枕許　多聞

川柳雜誌社　加古川支部句報（兵庫縣）

二月二十日黄彩居ニテ　加納梅更報

鏡

鏡屋の前を氣取つてもぎは過ぎ　絹水
まだ〳〵の年と鏡へなでて見る　黄彩
散髪が濟んで鏡へ若うなり　同
向ひ側鏡に寫るあで姿　泰山

みかん

舌打ちは子供に泣かれてみかん買ひ　絹水
氷靈のみかん其儘つんであり　黄彩
夏みかん割つて涙を拭いてゐる　同
甘いすき皆んなのみかんむいてやり　泰山

算盤が合はず時計が鳴つてゐる　呑陽
待ちぼけはだるい時計の音を聞き　同
時計屋へ又癇癪を立てに行き　同
犬時計不良と紙が貼つてあり　樂居
最敬禮恩賜の時計靜かなり　朝陽
五分づつ早めて置くも内助なり　大塚
退廳前一寸時計にれじをかけ　土井
壇上の辯士時計に目をくれず　同
遲刻した責任を負ふ腕時計　山田
時計をば曲げて漸やく顏を立て　阿形

萬よし偶會（大阪）三月弐日

銅貨、時計

夕刊屋落ちた銅貨を探してゐ　素人
走る子の手に汗ばんだ銅貨なり　愚陀
うどんやへ小引出しから二錢足し　萬よし
白い指に銅貨朝殺されて居る　亂耽
時計すゝませてすれて見る　素人
時ばかり進んで行くにものたらず　武子
落ちついて居るのに邪慳な目醒　加香
落ちついた心に時計走つてゐ　武子
時計いつそさぼつてやれと思ふなり　亂耽
時計思ふに淋しい夜だ　同
支配人三時の針に氣がつかず　萬よし

三月十二日　漫畫、二日醉

二日醉女房し．り顏に見へ　妙見
お母さんがいつも困る二日醉　敏子
二日醉今日の矢氣を澁ふ見る　小萬よし
おかへりと言はれてさめた二日醉　其好
二日醉ゆうべの連れの事を聞き　葉二
二日醉女將はおたのしみと言ひ　柳々
二日醉のふくみ過ぎたり齒磨粉　亂耽
二日醉腕を伸せば葉卷あり　同
二日醉電氣がついて風呂へ行き　萬よし
女房の皺を見つける二日醉　同
喧騷な暮しに漫畫集が着き　加香
漫畫家と思へぬやうな男前　萬よし
陣笠を漫畫團子の樣に書き　同
漫畫見て鏡に女優訴へる　革郎
その儘で漫畫の顏とひやかされ　同

雜

失業のたゞ電柱の影を踏み　佳山
惚れ切つた氣がポットルを例べてる　加香
棧敷から魚屋のおかみ辭儀をする　萬よし
となたかと思もや毛皮で廣告屋　同
ざさみ皿割れて土曜の急がしさ　同
果して三號は出ず仕舞なり　同
先生に逆らふことをもう覺へ　革郎
廣告に欺されたとは言へぬなり　同
はいと云ふことのなか〳〵に言ひ得ず　同

芦城川柳社金鐵子居小集（小松）

足袋　太魚選

（秀）籔入に小僧足袋まで新らしい　柳三
洗濯の足袋の凍つた朝を知り　川柳子
（軸）白足袋が跳ねて歇留多の夜が更ける　太魚

廣告　柳三選

（秀）廣告を背負つて人の群へ立ち　川柳子

足音　水聲選

足音に馴れて歸る暗い闇　金鐵子
足音に座りなほして猪口を持ち　柳一路
（軸）足音が聞ゐ教室しんとする　水聲

犬　川柳子選

先き曳の犬に親方勵まされ　金鐵子
巡禮に犬ば不審の首を曲げ　太魚
吠ゐられてからは自轉車風を切り　水聲

當選　柳一路選

當選の夜は心から醉ひつぶれ　柳三
當選の夢今日きりの宵となり　金鐵子
連日の疲れを見せぬ當選者　川柳子
運動者みな確實に思つて居　水聲
（軸）當選へ御祝ひに來る有權者　柳一路

待つ　金鐵子選

待つてゐる耳につれない忍び三味　太魚
待つたなし最後の勝負石を置き　川柳子
（軸）待つ間自分一人を考へる　金鐵子

月二會例會（尼崎）

二月四日　於木三居　同人報

席題　印

實印のから息子ぐればじめ　白帆
保證人一つの判にすましこみ　二竹
實印をおす母親の手がふるへ　吟女
重役の机印箱だけがあり　木三
無造作に印を返した代書人　松郎
割印をしてもう一度讀み直し　同

兼題　共稼

共稼ぎかへり早いが飯を焚き　文月
共稼ぎ中學だけはやる氣なり　青歇
共稼ぎお前も俺もまだ若し　白帆
つり合はぬなりで出て行く共稼　二水
友を訪ひ妻の居殘り日と云はず　木三
共稼ぎたまるだろうと里の母　虚白
共稼ぎ隣の嫁の派出なまげ　吟女

共稼ぎ妻へ課長の親しすぎ　同
後　押の背の子供に風車　如月
共稼ぎ猫責時を鳴いてゐる　龍三
共稼ぎする決心が嫁に行き　二竹
共稼ぎお前はお米俺りや家賃　同
共稼ぎ末を楽しむ膳につき　九柳
共稼ぎ少したまつて慾がつき　同
寢過した罪をさせ合ふ共稼ぎ　松郎
共稼ぎ男だけでも焚いてゐる　同
共稼ぎよううまが合ふのでもなく　同

蒼梧舎例會（大阪）

三月九日於杭全町岩城狸仙邸　石川双葉子報

句評會兼題　電車　共選

チト遲れあわてゝ乘れば課長ゐる　惡源太
傘をすぼめて電車すげなう閉められ　舟々
終電車おしむ別れに過ぎるなり　双葉子
電車内廣告を讀む知らぬ顏　平八
滿員車押された風で押して乘り　狸仙
滿員になつて車掌の荒々し　同
つり革を二つ握んで酔ふてゐる　蒼梧樓
輕い音てゝ電車は車庫へ入り　同

杭　共選

高慢が出すぎた杭にたとへられ　狸仙
杭い打つ男に花が散つてゐ　青柳子
棒杭を打つ音暫くして聞え　耿三
杭生々しくも今日から人のもの　舟々
杭と杭大きな蟹の爪がみに　惡源太
爭をよそに打ち込む明示杭　蒼梧樓

苦笑　共選

苦笑する度びに頭が痒くなり　惡源太
友人の前で亭主ののろけなり　耿三
力作へ撰者苦笑で評を入れ　狸仙
苦笑されてお上手云ひ直し　平八
御無沙汰な只仲人は笑つてる　武藏坊
二日酔昨夜の連れが眞似るなり　蒼梧樓
微苦笑腕をはずせば茶が澁し　舟々
笑つては見たが涙のかくされず　青柳子

横　共選

横顏をジロリ巡査見て通り　惡源太
ツンと横向ひたが肩がゆれてゐる　狸仙
四五人の男に娘横へそれ　双葉子
畵探しを横から見れば一つ知れ　蒼梧樓
その横へ立つて家令も寫される　舟々
横丁を曲つた迄は知つてゐる　武藏坊

棚　共選

欄の上坊やの智惠の屆きかれ　狸仙
勃世帶棚の張りたい氣がのかず　平八
棚の函そつとおろすに雪崩落ち　蒼梧樓
棚つゝてのせれば襖開かぬなり　惡源太
こくめいに棚を外して大家去に　舟々

意地　共選

意地張つて母に斷はり云はせる　平八
朋輩の意地をまともに受けて泣き　舟々
意地惡く今日後任の出來たあと　武藏坊
意地惡く探すカードは見當らず　蒼梧樓
意地づくへ勘定すくの遊らはず　狸仙
其意地へ生活難の迫つて來　同
意地で立つ男に拍手なりやまず　青柳子
口元と其のまなざしに意地を見せ　同
意地張つて後で寂しい氣のゆるみ　耿三
意恬地には誰がしたぞと前科者　同

バスケット　共選

ぎてる樣にも見へるバスケット　舟々
バスケットつまづき相にかけて來　蒼梧樓
バスケット片手が取れて抱へこみ　耿三
たくましき手に唯一のバスケット　双葉子

席題　綱　互選

綱引きは負けてる方へ一人つき　耿三
綱引きの一人力をぬいて見る　狸仙
綱引で運動會は黄昏れる　青柳子
綱引にキャラメルに一つ飛で出る　蒼梧樓

席題　膏藥　互選

許嫁伴創膏を不思議がり　舟々
エキストラ伴創膏を貼つて出る　同
膏藥は二つに折つて棄てられる　蒼梧樓
膏藥をはるに番臺頼まれる　同
弟子入りの當座膏藥はらされる　双葉子
治るとも見ぬず膏藥またはられ　狸仙
美しさ膏藥がちと氣にかゝり　同
藥湯を出て膏藤をはつてゐる　惡源太
いつの間か膏藥着物の方へつき　耿三
頭痛膏張れど女給のもてぬなり　平八

天折　互選

狸仙君亡妻子靈に捧ぐ

罪惡も知らず當の内に散り　耿三
一人ッ子死んでめつきり父は老け　惡源太
天才の人であつたと惜しまれる　平八
せめて妻の居らと思ふ日のあらん　双葉子
御文章其のまゝに死をいたまれる　蒼梧樓
學友の弔辭に母は泣きくづれ　同
若い一生淵靜かにだてられる　舟々

二柳子居偶會（大阪）

三月十四日午後一時　橋本二柳子報

先生

先生に悪い處で見附けられ　秀甫
先生が先頭一年生つづき　眠聲
先生を追越しおちぎする子供　二柳子
先生も運動場に日向ぼこ　鮎美
胃が悪くなりますと先生食させず　同

見本

一つだけ買ふに見本をたんと出し　鶴峯
妾宅の書へ見本の少な過ぎ　鮎美
一つかみ見本にしては多すぎる　二柳子
洋反物見本帳から先に見せ　秀甫
親父さん見本で承知出來ぬなり　同
その電話丁稚の見本早いこと　眠聲
見本品今東京ではやつて居　同

友達　二柳子選

友達も理屈になれば負けぬなり　秀甫
友達が來てから急な笑ひ聲　鶴峯
あの時は君と自炊もしてゐたが　同
病上りまだ友達の世話になり　鮎美
友達が露骨に云ふた治療法　同
どもならん奴と友達引受ける　同
（軸）友達でもあり博士を迎にてる　二柳子

劍柳庵小集（神戸）

三月八日夕　女店員　楊井二南報

女店員隣の男嫌ひなり　鎌月
女店員賣損ふて腰をかけ　紋太
女店員戀に精進して歸り　亂耽
女店員春に先立つ中にゐる　一狂
女店員自分の好きなのをすゝめ　同
女店員柱鏡に向いて行き　素生
女店員賣場隔てゝ笑ひあひ　同
女店員丸い返事をして呉れる　二南
女店員思案をすると見せかける　同
女店員進れて來た子へ笑て呉れ　睡花
冗談に云ふたと知らぬ女店員　同
女店員ちと可笑しゆて後向き　嶺月
御夫婦を等分に見る女店員　同
江戸辯が丸出しになる女店員　同

立聞き

立聞きへ隣の間から名を呼ばれ　愚陀
立聞きは自分の罪も頒けて　二南
立聞きへ咳が出さうになつてくる　一狂
立聞きへ廊下の端に人の影　東洋鬼
立聞きに外からの音喧ましい　素生
立聞いてゐた音少しさせてゆき　紋太
立聞きへごだい方角違ひなり　乱耽
立聞きはそのまゝすまぬことになり　謙月
立聞きはミシリ〳〵と引き返へし　嶺月
咳すれば立聞き一寸動くなり　同
立聞きへ世間があまり寂靜まり　睡花
立聞いてゐたは味方になる男　同

現場

書飯にしろと現場へ知らせて來　鎌月
肝心の人が現場を遠くゐる　二南
くどう云ふ一人は現場見てるなり　東洋鬼
終ひまで現場を見てゝ出前持　素生
吸殻を現場の刑事つまみ上げ　紋太
現場から遠く離れて畑を打ち　嶺月

紋付　紋太選

紋付へ遠慮もなしに小さい子　愚陀
紋付で出て眞直ぐ歸つて來　鎌月
紋付をぬぐと藝者が一人殖ゑ　一狂
紋付は遠慮の出來る姿なり　二南
紋付が肩の凝つたを訴へる　同
紋付を思ひ掛けなく着る日が來　素生

紋付の後へ前へ妻動き　同
（人）紋付の坐つてばかり居れぬなり　鎌月
（地）紋付で來て忙しさをよそに居る　東洋鬼
（天）紋付で歸る街々寢靜まり　睡花
（軸）女房も紋付を着る大切な日　紋太
紋付で矢張り子好と笑はれる　同
紋付で乘る自動車に順をつけ　同

月二會例會（尾崎）

三月三日夜於　木三居　同人報

身の上　互選

身の上を聞けば仲居は三味を取り　吉期
あれで居て義理の親子であつたのか　盧白
落胤ときかぬ昔が明るくて　よし源
つまさるゝ身にたくわへは更になし　三愕
しんみりと身の上話す妓のまつげ　吟女
仕合せに見えても辛い御身の上　龍三
髪を梳き〳〵身の上偲んで居　二竹
お互ひに似た身の上に飲明し　二水
酒癖がまた身の上を語り出し　木三
茶せん髷身の上ばなしで今日も暮れ　同
身の上を知つて娘はひがみ出し　金令
生さぬ仲とも知らなで無理を云ひ　同
身の上の向ふに搖れる水藥　松郎
繼子としての身の上を話し　同

編輯後記

▼三月號は非常によく賣れて方々の本屋で賣切れました。それだけ本誌の努力が一般から認められたことゝ喜んでゐます。

▼梅が咲いた、櫻の芽が含らんで來た、ぽか〳〵と暖かくなつて來た。田を耕す農夫の姿も長閑である。何かせなければならぬといふ焦燥に驅られる。四月號の編輯が終つた日は丁度彼岸入りの日、善男善女のお寺詣りの雜踏をよそに、路郎居で筆を走らせてゐると、遠くで豆腐屋の笛が聞へる。

▼原稿が相變らず輻輳し、次號廻しにした原稿が多い「川柳時代大觀」に就いて蛭子省二、森東魚兩氏から原稿が來てゐり、尙ほ西原柳雨氏から寄稿される事になつて居るが、岡田三面子氏の「時代大觀」に就いてが本號で終つたので次號から續載する豫定にしてゐます。

▼桑原京郎氏が本社京都支部創立の準備に忙殺されてゐるさうです、京郎氏は五月上旬に創立句會を開催したいと言つて居られます。

▼長春の中野柳陽氏が今回維持社友として御援助下さる事になりました感謝します。

▼道頓堀支部の主催で三月十一日に灘御影銘酒「白鶴」の酒藏を見學した後酒藏樓上で句會を開きました(會報參照)

▼たまむし吟社の三月句會は八日久宮蕊去に付謹しんで哀悼の意を表し中止されました。四月上旬に柳誌「たまむし」を發行されるさうです。

▼四月十五月に「金澤川柳大會」を金澤市佛教青年會館で開催されるさうです盛會を祈ります。

▼安井ひろし氏は三月七日から十四日まで朝日會館で開催された「佛蘭西繪畫展」へ夫妻で出張され多忙を極はめられてゐました。ひろし氏の活動には同人連驚異の目をみはつてゐます。

▼不朽洞から三月上旬に發行の豫定だつた「累卵の遊び」は本文の印刷は早く終つたのですが表紙の印刷が遲れた爲めに發行が遲延してゐましたが、既に八九分通り出來上り、本誌が出る頃に一緒に發行の豫定で、申込順に發送されるさうです、定價一圓です、廣告を御覽下さい。

▼井上凡平氏は二月十七日に長女を儲けられ、和子と命名。

▼月二會幹事杉原木三氏が二月上旬から病臥されてゐましたが三月上旬に全快されました。

▼本社贊助員片岡直方氏は二月初旬流感に罹られましたが三週間で全快されました。

▼特別社友原史風氏の電話番號が堀川〇九二七番に變更

▼三月十八日贊助員藤木卯之助氏の店員と道頓堀支部庄萬よし氏のオールド・ボイス倶樂部が城東練兵場で野球試合を爲し12A對1で藤本軍の勝に歸した。

▼和田源坊氏の令妹が死去されました哀悼します

▼本紙に每號廣告をして下さる內外蓄音器商會の社長森垣二郎氏の尊父長治郎氏が三月十六日七十九才の高齡で逝去されました謹しんで哀悼します(革郎記)

誤植訂正

第五卷第六號課題(四月五日締切〆手櫂(福田山雨樓　松丘町二共選)「**手摺**」はの誤植です

轉居と改號

▼三好革郎氏は大阪府下池田町マスミ七八五に轉居

▼和田萩麿氏は大阪市東區島町二ノ四四奥山昇三氏方に轉居

▼杉原木三氏は尼崎市別所村四五〇に轉居

▼上野金鐵子氏は錦水と改號

▼宮田柳々氏は青歌と改號杉田木兎坊氏は綠青園と改號

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の郵紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第五卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以內）

▼馬　森　東　魚選

▼貰ひ子　佐々木三福選

▼手　摺　福田山雨樓　松丘町二　共選

第五卷第七號課題

五月五日締切

（各題十句以內）

▼本　職　淺井五葉選

▼砂　相元紋太選

▼畫　寢　太田朝陽　庄萬よし　共選

毎號募集

▼近作柳樽（廿句迄）麻生路郎選

▼古句質疑（三句迄）蛭子省二擔當

▼各地柳壇（會報）

▼文　章（評論研究吟行漫文）

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號　一部　金參拾錢

新春特輯號　一部　金五拾錢

八月特輯號　一部　金四拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封緘に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

第五卷第四號

（毎月一回一日發行）

昭和三年三月廿五日印刷

昭和三年四月一日發行

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎

大阪市西成區千本通五丁目七番地

發行所　川柳雜誌社

大阪市西成區千本通五丁目七番地

振替口座大阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房　其他市內各書店

（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤（廣島）石塚

（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　田中香涯　長崎柳秀　野草省三　藤國枝史郎　藤村本卯之助作　小酒井不木

客員

赤井清司　末弘嚴太郎　伊藤彦造　西原柳雨　大島濤明　岡田三面子　川上三太郎　川村花菱　吉田清　岡鳥平　武笠山椒　安川久流美

特別社友

前田雀郎　小出楢重　木村半文錢　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　森東魚　岩崎柳路　岩本素人　西本三笑　原史風　太田朝陽　德田双柳　喜田飯山　北山悟郎

維持社友

川合舟々　河南放馬　龜井花童子　横田眠聲　高橋かほる　高見柳骨　竹内多聞　矢田右大臣　松本助六　松盛琴人　酒井駒人　藤里藤園　北山悟郎

編輯局（特別社友）

庄萬よし　猪野燕柳　石川双葉子　長谷川一徹　畑田炭車　本田柳一路　秉重白鷗　高橋綠郎　辻左馬　中野柳陽　中澤濁水　中見光路　桑原京郎　桑島文綠　柳川洲馬　安西杏三　松丘町二　越村加香　朝田新水　水田黃彩　水谷鮎美　宮本銀砂子　檜山千代二　嶋田翠峯　森田笑太郎　三好革郎　安井ひろし　麻生路郎　麻生葭乃　橋本二柳子　主幹

大阪市南區新戎橋南詰　道頓堀支部　幹事　庄萬よし

大阪市北區北森町三十二　天滿支部　幹事　北山悟郎

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七　濱寺支部　幹事　太田朝陽

神戸湊町一丁目電氣局西　神戸支部　幹事　庄萬よし

山口縣山口町石原小路　山口支部　幹事　柳川洲馬

東京市芝愛宕町一ノ六大成社內　東京支部　幹事　岩崎柳路

函館市青柳町五〇　函館支部　幹事　龜井花童子

大阪市住吉區安立町五丁目　住吉支部　幹事　德田双柳

朝鮮仁川仲町一丁目八　仁川支部　幹事　矢田右大臣

松江市外川津野津方　松江支部　幹事　松丘町二

石川縣輪島町鳳至上町　輪島支部　幹事　桑島文綠

石川縣小松町猫橋詰　小松支部　幹事　本田柳一路

高知市本與力町　高知支部　幹事　中澤濁水

大阪市西淀川區姫島町五二一　姫島支部　幹事　横田眠聲

大阪市外阪急沿線刀根山療養所內　螢ヶ池支部　幹事　安西杏三

金澤市榮町　金澤支部　幹事　宮本銀砂子

大阪市東區糸屋町二丁目七　糸屋町支部　幹事　川合舟々

和歌山縣田邊町幽靈松下　田邊支部　幹事　辻左馬

島根縣簸川郡今市町　簸川支部　幹事　森田笑太郎

豐橋市旭町　豐橋支部　幹事　高橋綠郎

神奈川縣平塚町旭座前　平塚支部　幹事　酒井駒人

兵庫縣加古川町大川町　加古川支部　幹事　水田黃彩

青森市古川町美法二し　青森支部　幹事　喜田飯山

京都市七條大宮東入　京都支部　幹事　桑原京郎

山口縣都濃郡富岡村上野　富岡支部　幹事　兼重白鷗

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾册か求めるうちには幾册かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

（路郎生）

古本 高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一册

定價 五十錢 郵稅 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリと合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

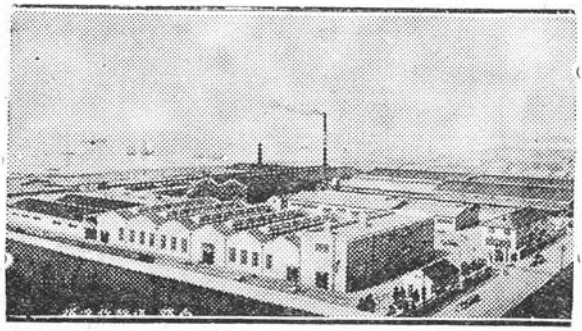
大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五六二番

白鶴

東洋一の清酒壜詰工場

灘御影
嘉納合名會社釀



白鶴選句發表（二）

選外佳作二十八句

白鶴に熨斗のついてる御榮轉　堺　太路

白鶴と答へ仲居の氣は引けず　安東縣　苔草

旅に居て白鶴黨がなつかしい　螢ヶ池　彦春

片口へ白鶴渦を卷き乍ら　中津　彌一郎

任せたら鮮人白鶴買ふて來る　清水谷　翠川

甘黨も白鶴の名は知つて居り　大阪醫大　一徹

白鶴を勸められてる二ロ醉　別府　凡一

白鶴をつい四本呑み五本呑み　尼崎　活陽

白鶴へ課長他愛もなくくづれ　大阪　錢塘

白鶴をよばれ白鶴黨になり　函館　まさを

同樂の眼にも白鶴のすばらしさ　播州　元治

白鶴と聞けば成程邂逅ふ味　河内　孤舟

白鶴の横からハイと首が出る　螢ヶ池　呂山

白鶴をきき分ける程好きであり　神戸　郊村

戀しさは白鶴呑んでからの事　廣島　光登

白鶴を呑む程彼も出世して　妙寺町　旗岳

宵の路次白鶴の瓶入れ替り　大阪　將兵

白鶴に今日一日の醉心地　天神橋　靖弘

白鶴の味を覺へたビール黨　尼崎　突支坊

白鶴が積まれ宴會狹ふ脫ぎ　骨屋町　陽喜亭

白鶴でお客の機嫌增す斗り　河内　笑耶

白鶴は女將自慢の一つなり　島町　青歌

白鶴と聞いて呑む膝組み直し　田島町　九柳

白鶴の樽で場を取る上かんゃ　同

のんびりと白鶴に醉ふお正月　釧路　呑天坊

柏手に白鶴すつと並んでゐ　金澤　喜花

白鶴に未練殘せば汽車はなし　仁川　新米生

白鶴の積荷を見てる懷手　天滿　久耶

川柳滑稽句集

川上三太郎編　宮尾しげを畫

菊判半截上製函入　定價九拾錢　郵送料八錢

新刊

滑稽は人生の潤ひであり長き旅路のオアシスである。然かも川柳は其の滑稽を以て出發したる世界に於ける最短形式の一行詩である。茲に川柳滑稽句集は其の本來の面目たる滑稽の粹の粹を抜き、或は哄笑顎を外すもの、或は皮肉骨を刺すもの、或は苦笑舌を嚙むもの、古今の佳吟秀句集つて三千餘句悉く此の中にある。これやこの人の世、笑ひの玉手箱……讀む人何時か不景氣を苦にせず、生活苦を超越し、喧嘩を仕損なひ、不平を忘るゝ事、恰も二に二を加へれば合はせて四となり、品川の先はこれ海であるが如し。

同人編　**新川柳壹萬句集**

四六判横綴函入　定價壹圓五拾錢　郵送料拾錢

三面子　岡田朝太郎著　**寛政改革と柳樽の改版**

四六判布裝函入　定價貳圓五拾錢　郵送料拾八錢

發行所　東京日本橋區小町六番地　振替口座東京壹〇五六五番　砲兵部磯甲陽堂

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

定價 壹圓（送料拾錢）

發行所 大阪市西成區千本通五の七
不朽洞
振替大阪五二五八五番

私が不朽洞を經營しまして その處女出版が豫想外に各方面の皆樣から白熱的歡迎を受けまして、毎日多數の御註文を下さるので整理に忙殺されてゐます。こんな嬉れしいことはございません。感謝して居ます。今後ともよろしくお願ひします。（復乃）

川柳とは何ぞや――の數萬言を聽くよりも本書を繙け！
實に愉快に、而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

内容概目

川柳漫畫 **累卵の遊び**
麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した る川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの――。

日月は輝く
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの――。

大衆と共に
「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの――。

既刊

品切に なぬらな ちう
至急御註文下さい

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和三年三月二十五日印刷納本　昭和三年四月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

（第五十一號）

定價　參拾錢

蓄音器が鳴つてゐる家には幸福充つ

合資會社　内外蓄音器商會

阪神沿線今津町